

Oracle9i Developer Suite for Windows and UNIX

インストール・ガイド

リリース 2 (9.0.2)

2002 年 8 月

部品番号 : J06449-01

ORACLE®

Oracle9i Developer Suite for Windows and UNIX インストール・ガイド, リリース 2 (9.0.2)

部品番号 : J06449-01

原本名 : Oracle9i Developer Suite Installation Guide, Release 2 (9.0.2) for Windows and UNIX

原本部品番号 : A95828-02

Copyright © 2002 Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

* オラクル社とは、Oracle Corporation（米国オラクル）または日本オラクル株式会社（日本オラクル）を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation（米国オラクル）およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合次の Notice が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

目次

はじめに	vii
------------	-----

1 インストールの概要

1.1 Oracle9i Developer Suite のインストール手順の概要	1-2
1.2 インストール手順について	1-3
1.3 Oracle9iDS コンポーネントのインストールについて	1-4

2 インストールする前に

2.1 ハードウェア要件	2-2
2.2 サポートされるオペレーティング・システム	2-4
2.3 オペレーティング・システムのソフトウェア要件	2-5
2.4 他の製品との共存	2-8
2.4.1 ORACLE_HOME に関する注意事項	2-8
2.4.2 Oracle9i Developer Suite、複数のインスタンスのインストール	2-9
2.4.3 Oracle9i Developer Suite と Oracle データベースのインストール	2-9
2.5 インストールの準備	2-10
2.5.1 全般的なチェックリスト	2-10
2.5.2 ロケールの設定	2-10
2.5.3 ユーザー補助機能の使用 (Windows のみ)	2-11
2.5.4 Java Access Bridge のインストール (Windows のみ)	2-11
2.5.5 環境変数の設定 (UNIX のみ)	2-12
2.5.5.1 ORACLE_HOME	2-12
2.5.5.2 DISPLAY	2-13
2.5.5.3 TMP	2-13
2.5.5.4 TNS_ADMIN	2-14

2.5.6	UNIX のアカウントおよびグループの作成	2-14
2.5.6.1	Oracle Universal Installer インベントリの UNIX グループ名	2-14
2.5.6.2	Oracle ソフトウェアを所有する UNIX アカウント	2-14
2.5.7	コンポーネント別のインストール準備作業	2-15
2.5.7.1	Oracle9i JDeveloper	2-15
2.5.7.2	Oracle9i Business Intelligence Beans	2-15
2.5.7.3	Oracle9i Reports Developer	2-15
2.5.7.4	Oracle9i Discoverer Administrator	2-15
2.5.7.5	Oracle9i Warehouse Builder (OWB)	2-15
2.5.7.6	Oracle9i Clickstream Intelligence Builder	2-16
2.5.7.7	Oracle9i Forms Developer	2-16
2.5.7.8	Oracle9i Software Configuration Manager (従来の Oracle Repository に相当)	2-16
2.5.7.9	Oracle9i Designer	2-17
2.5.8	インストール中に必要な情報	2-17
2.5.9	システムの移行またはアップグレード	2-17
2.6	Oracle Universal Installer について	2-18
2.6.1	インベントリ・ディレクトリ	2-18
2.6.2	Oracle Universal Installer の起動	2-19
2.6.2.1	Windows の場合	2-19
2.6.2.2	UNIX の場合	2-21

3 インストール手順

3.1	Oracle9i Developer Suite のインストール	3-2
3.2	インストール完了後の作業	3-17
3.2.1	全般的なチェックリスト	3-17
3.2.1.1	NLS	3-17
3.2.1.2	TNS 名	3-17
3.2.1.3	ポート番号	3-18
3.2.1.4	OC4J Instance for Oracle9iDS	3-18
3.2.1.5	ユーザー補助機能 (Windows のみ)	3-19
3.2.2	各コンポーネントのインストール完了後の作業	3-20
3.2.2.1	Oracle9i JDeveloper	3-20
3.2.2.2	Oracle9i Business Intelligence (BI) Beans	3-27
3.2.2.3	Oracle9i Reports Developer	3-27
3.2.2.4	Oracle9i Discoverer Administrator	3-29
3.2.2.5	Oracle9i Warehouse Builder	3-29
3.2.2.6	Oracle9i Clickstream Intelligence Builder	3-29

3.2.2.7	Oracle9i Forms Developer	3-30
3.2.2.8	Oracle9i Software Configuration Manager (従来の Oracle Repository に相当)	3-31
3.2.2.9	Oracle9i Designer	3-31
3.2.3	その他のドキュメント	3-32

4 アンインストールと再インストール

4.1	アンインストール	4-2
4.1.1	Oracle Universal Installer を使用したアンインストール手順	4-2
4.2	再インストール	4-6

A 移行に関する注意

A.1	Oracle9i Developer Suite	A-2
A.2	Oracle9i JDeveloper	A-2
A.3	Oracle9i Reports Developer	A-3
A.4	Oracle9i Discoverer Administrator	A-4
A.5	Oracle9i Warehouse Builder	A-4
A.6	Oracle9i Clickstream Intelligence Builder	A-4
A.7	Oracle9i Forms Developer	A-4
A.8	Oracle9i Software Configuration Manager	A-5
A.9	Oracle9i Designer	A-5
A.10	その他のドキュメント	A-6

B コンポーネント

B.1	Oracle9i JDeveloper	B-2
B.1.1	対応するデプロイ環境	B-2
B.1.2	オラクルの Web サイト	B-3
B.1.3	Oracle9i Business Intelligence Beans	B-4
B.1.4	UIX	B-4
B.1.5	Bali	B-4
B.2	Oracle9i Reports Developer	B-4
B.3	Oracle9i Discoverer Administrator	B-5
B.4	Oracle9i Warehouse Builder	B-5
B.5	Oracle9i Clickstream Intelligence Builder	B-5
B.6	Oracle9i Forms Developer	B-5
B.7	Oracle9i Software Configuration Manager	B-6
B.8	Oracle9i Designer	B-6

B.9	その他のドキュメント	B-6
-----	------------------	-----

索引

はじめに

このマニュアルは、Windows または UNIX システムに Oracle9i Developer Suite（従来の Oracle Internet Developer Suite に相当）をインストールする手順を説明します。特に断りがなければ、UNIX へのインストールの手順の説明は、Sun Solaris、HP HP-UX、Linux Intel システムのみを対象としています。

ここで説明する項目は次のとおりです。

- [対象読者](#)
- [このマニュアルの構成](#)
- [関連文書](#)
- [表記規則](#)

対象読者

このマニュアルは、開発者、データベース管理者、および Oracle 製品のインストール作業を担当する方を対象としています。クライアントとサーバーから成るアーキテクチャや両者の関係、データベースの概念についての知識があるものとして解説しています。

このマニュアルの構成

このマニュアルは次の各章および付録で構成されています。

第 1 章「インストールの概要」

Oracle9i Developer Suite のインストールと使用可能なインストール・オプションについての概要を説明します。

第 2 章「インストールする前に」

Oracle9i Developer Suite のインストールに必要なハードウェアおよびソフトウェア要件を説明します。また、Oracle9i Developer Suite をインストールする前に行う必要がある作業についても説明します。

第 3 章「インストール手順」

Oracle9i Developer Suite のインストール手順と、その完了後に行う作業について説明します。

第 4 章「アンインストールと再インストール」

Oracle9i Developer Suite のインストール手順と、再インストール手順について説明します。

付録 A「移行に関する注意」

旧バージョンの Oracle9i Developer Suite コンポーネントからの移行またはアップグレードに関する情報を紹介します。

付録 B「コンポーネント」

Oracle9i Developer Suite のコンポーネントについて説明します。

関連文書

より詳しい解説資料が、次の CD-ROM に収録されています。

- Oracle9i Developer Suite のドキュメント CD

リリース・ノート、インストレーション・マニュアル、ホワイト・ペーパーまたはその他の関連文書は、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) に接続すれば、無償でダウンロードできます。OTN-J を使用するには、オンラインでの登録が必要です。次の URL で登録できます。

<http://otn.oracle.co.jp/membership/index.html>

OTN-J のユーザー名とパスワードを取得済みの場合は、次の OTN-J Web サイトの文書セクションに直接接続できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/index.html>

表記規則

このマニュアルでは、次の規則に従って表記しています。

表記	意味
太字	ユーザーが入力するキー、クリックするボタンを表します。また、ダイアログ・ボックス内のラベルや選択肢も太字で表します。
固定幅フォントの小文字	実行可能ファイル、ファイル名、ディレクトリ名およびユーザーが指定する項目のサンプルを示します。ユーザーが指定する項目としては、データベース名、ネットワーク・サービス名、接続識別子の他、ユーザーが定義したデータベース・オブジェクトや構造体、列名、パッケージやクラス、ユーザー名やロール、プログラム・ユニット、パラメータ値などがあります。 注意： 大文字と小文字が混在している項目名があります。その場合は記述内容のとおりに入力してください。
固定幅フォントの大文字	システム側で指定する項目を示します。パラメータ、権限、データ型、 Recovery Manager キーワード、 SQL キーワード、 SQL*Plus またはユーティリティ・コマンド、パッケージ、メソッドに加え、システムが管理に使用する列名、データベース・オブジェクトや構造体、ユーザー名、ロールなどがあります。
.	垂直の省略記号は、例示する必要のない情報の省略を示します。
...	水平の省略記号は、その文またはコマンドに必要な情報の省略を示します。
<>	ユーザーが指定する名前は、山カッコで囲んで示します。
[]	ユーザーが選択可能な（または選択しなくてもよい）オプション句は、大カッコで囲んで示します。

インストールの概要

この章では、Oracle9i Developer Suite のインストール手順の概要を説明します。用途に応じて、いくつかのインストール方法から選択できます。説明する項目は次のとおりです。

- [Oracle9i Developer Suite のインストール手順の概要](#)
- [インストール手順について](#)
- [Oracle9iDS コンポーネントのインストールについて](#)

1.1 Oracle9i Developer Suite のインストール手順の概要

Oracle9i Developer Suite (Oracle9iDS) のインストール方法には、次の 4 つがあります。

- **J2EE Development:** Java、HTML、XML、および SQL を使用した Java 2 Platform Enterprise Edition (J2EE) アプリケーションの開発に必要なコンポーネントがインストールされます。Oracle9iAS Containers for J2EE (OC4J) によるテスト機能が含まれます。
- **Business Intelligence:** (Windows のみ) ビジネス・インテリジェンスによるトランザクション・アプリケーションを拡張するための開発ツールがインストールされます。関連する Oracle9iAS ランタイム・サービス、および OC4J によるテスト機能も含まれます。
- **Rapid Application Development:** (Windows のみ) Reports ベースおよび Forms ベースのアプリケーションを素早く構築するための J2EE Development コンポーネント、および開発ツールがインストールされます。また、データベースや N-Tier アプリケーションの設計や開発に必要な、ソフトウェア構成管理ツールおよびツールセットも含まれます。関連する Oracle9iAS ランタイム・サービス、および OC4J によるテスト機能も含まれます。
- **完全:** Windows の場合は、Oracle9iDS のコンポーネントがすべてインストールされます。UNIX の場合は、J2EE Development コンポーネント、Reports ベースおよび Forms ベースのアプリケーション構築に必要な開発ツールがインストールされます。

第 2 章「インストールする前に」では、Oracle9iDS のインストールに必要なハードウェアおよびソフトウェア要件について説明します。

第 3 章「インストール手順」では、Oracle9iDS のインストール手順について説明します。

付録 B「コンポーネント」では、Oracle9iDS のコンポーネントについて説明します。

次に示す 2 つの表に、Oracle9iDS のインストール・オプション、および各オプションによってインストールされるコンポーネントを示します (Windows は表 1-1、UNIX は表 1-2 を参照してください)。

表 1-1 Oracle9iDS のインストール・オプションとコンポーネント (Windows)

コンポーネント	J2EE Development	Business Intelligence	Rapid Application Development	完全
Oracle9i JDeveloper	○	×	○	○
Oracle9i Reports Developer	×	○	○	○
Oracle9i Discoverer Administrator (従来の Discoverer Administration Edition に相当。Oracle9i Discoverer Desktop を含む)	×	○	×	○
Oracle9i Warehouse Builder	×	○	×	○
Oracle9i Clickstream Intelligence Builder	×	○	×	○
Oracle9i Forms Developer	×	×	○	○
Oracle9i Software Configuration Manager (従来の Oracle Repository に相当)	×	×	○	○
Oracle9i Designer	×	×	○	○

表 1-2 Oracle9iDS のインストール・オプションとコンポーネント (UNIX)

コンポーネント ¹	J2EE Development	完全
Oracle9i JDeveloper	○	○
Oracle9i Reports Developer	×	○
Oracle9i Forms Developer	×	○

¹ Oracle9iDS の全機能を利用できるように、UNIX 版には Windows 版のコンポーネントもすべて含まれています。

1.2 インストール手順について

Oracle9iDS のインストール手順は、次の 3 段階に分かれています。

- **インストールの準備** : Oracle9iDS をインストールする前に必要な作業を行います。Oracle Universal Installer を起動してインストールを開始します。詳細は [2.5 項「インストールの準備」](#) および [2.6 項「Oracle Universal Installer について」](#) を参照してください。

- **インストール段階:** インストーラの指示に従って、Oracle9iDS をインストールします。詳細は第3章「インストール手順」を参照してください。
- **インストール後の作業:** Oracle9iDS のインストール後に必要な作業と設定を行います。詳細は3.2項「インストール完了後の作業」を参照してください。

注意: 旧バージョンから移行またはアップグレードする場合は、インストールを行う前に必ず付録 A「移行に関する注意」をお読みください。

1.3 Oracle9iDS コンポーネントのインストールについて

Oracle Universal Installer によって、Oracle9iDS のコンポーネントがデフォルトの設定値でインストールされます。また、ローカルまたはリモート・サーバー製品にアクセスするために必要な、基本的なネットワーク要素も設定されます。

Oracle9iDS をインストールすれば、Oracle9iDS を使用して開発したアプリケーションの実行またはテストを行うために、Oracle9i Application Server (Oracle9iAS) を別にインストールする必要はありません。選択したインストール・オプションによっては、Oracle9iDS をインストールすると、関連する Oracle9iAS ランタイム・サービス (OC4J、Oracle9iAS Forms Services、および Oracle9iAS Reports Services) がテスト・アプリケーション用にインストールされます。ただし、実際のデプロイ環境においても、アプリケーションをテストすることをお勧めします。

インストール中に、Oracle ホームの名前とパスを指定するように指示されます。1 つの Oracle ホーム・ディレクトリに複数の Oracle 製品を指定する方法や、1 台のコンピュータに複数の Oracle 製品をインストールする方法については、2.4 項「他の製品との共存」を参照してください。

インストールする前に

この章では、Oracle9i Developer Suite のインストールに必要なハードウェアおよびソフトウェア要件について説明します。説明する項目は次のとおりです。

- [ハードウェア要件](#)
- [サポートされるオペレーティング・システム](#)
- [オペレーティング・システムのソフトウェア要件](#)
- [他の製品との共存](#)
- [インストールの準備](#)
- [Oracle Universal Installer について](#)

2.1 ハードウェア要件

表 2-1 に、Oracle9iDS の基本的なハードウェア要件を示します。

表 2-1 Oracle9iDS のハードウェア要件

ハードウェア構成要素	要件
CPU	Pentium またはその互換プロセッサ（500 MHz 以上を推奨） または SPARC プロセッサ（200 MHz 以上を推奨） または HP PA-RISC プロセッサ（200 MHz 以上を推奨）
メモリー領域	■ 256 MB ¹
ディスク領域 ²	J2EE Development ■ 530 MB（Windows） ■ 850 MB（UNIX） Business Intelligence（Windows のみ） ■ 1.7 GB Rapid Application Development（Windows のみ） ■ 1.9 GB 完全 ■ Windows - 1.9 GB ■ UNIX - 1.71 GB
ページファイル・サイズ、 TMP、またはスワップ領域 の合計	■ Windows - 384 MB ■ UNIX - 500 MB

¹ Oracle9iDS コンポーネントによっては、これ以上のメモリーが必要な場合もあります。各コンポーネントに必要なメモリー領域については、表 2-2 を参照してください。

² ここには、すべての製品言語に必要なディスク領域を示しています。実際に必要なディスク領域は、インストール時に選択した言語によります。Microsoft Windows の場合は、複数のディスク・ドライブに分割してインストールすることも可能です。ただしその場合、通常は C ドライブに、さらに 50 MB の一時ディスク領域が必要になります。

表 2-2 に、Oracle9iDS の各コンポーネントの実行に必要なメモリー領域を示します。

表 2-2 Oracle9iDS のコンポーネントに必要なメモリー領域

コンポーネント	メモリー領域
Oracle9i JDeveloper	256 MB
Oracle9i Reports Developer	128 MB 256 MB ¹
Oracle9i Discoverer Administrator	128 MB
Oracle9i Discoverer Desktop	128 MB
Oracle9i Warehouse Builder	256 MB 512 MB ²
Oracle9i Clickstream Intelligence Builder	256 MB 512 MB ²
Oracle9i Forms Developer	128 MB 256 MB ¹
Oracle9i Software Configuration Manager (従来の Oracle Repository に相当)	256 MB
Oracle9i Designer	256 MB ¹

¹ Compare、Merge、Version History などの、ソフトウェア構成管理 Java ユーティリティを使用する場合。

² Oracle Enterprise Manager および Oracle Workflow と併用する場合。

2.2 サポートされるオペレーティング・システム

Oracle9iDS は、Microsoft Windows NT/2000/XP Professional、Sun Solaris、HP HP-UX、および Linux Intel の各オペレーティング・システムで使用できます。表 2-3 に、オペレーティング・システムと、各オペレーティング・システムにおいてサポートされる Oracle9iDS コンポーネントを示します。

表 2-3 オペレーティング・システムと Oracle9iDS コンポーネント

コンポーネント	NT/2000/XP Professional	Solaris ¹	Linux ²	HP-UX ¹
Oracle9i JDeveloper	○	○	○	×
Oracle9i Reports Developer	○	○	×	○
Oracle9i Discoverer Administrator (従来の Discoverer Administration Edition に相当。Oracle9i Discoverer Desktop を含む)	○	×	×	×
Oracle9i Warehouse Builder	○	×	×	×
Oracle9i Clickstream Intelligence Builder	○	×	×	×
Oracle9i Forms Developer	○	○	×	○
Oracle9i Software Configuration Manager (従来の Oracle Repository に相当)	○	×	×	×
Oracle9i Designer	○	×	×	×

¹ Oracle9iDS の全機能を利用できるように、UNIX 版には Windows 版のコンポーネントもすべて含まれています。

² Linux のデスクトップ環境のうち、Oracle9i JDeveloper の動作が確認済みなのは、KDE2 および GNOME のみです。

2.3 オペレーティング・システムのソフトウェア要件

表 2-4 に、Windows オペレーティング・システム上で Oracle9iDS をインストールするためのソフトウェア要件を示します。

表 2-4 Windows オペレーティング・システムのソフトウェア要件

ソフトウェア構成要素	要件
Windows オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Windows NT 4.0、Service Pack 5 以降 ■ Microsoft Windows 2000 ■ Microsoft Windows XP Professional Edition

表 2-5 に、Solaris オペレーティング・システム上で Oracle9iDS をインストールするためのソフトウェア要件を示します。Solaris 用のパッチ・ファイルは、次の Web サイトからダウンロードできます。

<http://java.sun.com/j2se/1.3/ja/install-solaris-patches.html>

表 2-5 Solaris オペレーティング・システムのソフトウェア要件

ソフトウェア構成要素	要件
Solaris 2.6	<ul style="list-style-type: none"> ■ j2sdk-1_3_1_02-solsparc-5_6_patch.tar ■ Linker patch:107733-09 以降 ■ /usr/lib/libthread.so.1 patch:105568-22 以降 ■ libaio, libc, wtachmalloc patch:105210-38 以降 ■ X Input & Output Method patch:106040-16 以降 ■ Linker patch:105490-07 以降 ■ OpenWindows 3.6:Xsun patch:105633-56 以降¹ ■ Chinese TrueType フォント :106409-01 以降² ■ SunOS 5.6:ssJDK1.2.1_03 fails with fatal errors in ISO8859-01 Locales:108091-03 以降³ ■ CDE 1.2:libDtSvc patch (推奨) :105669-10 以降 ■ Motif 1.2.7 Runtime library patch:105284-41 以降 ■ SunOS 5.6:Kernal update patch:105181-26 以降 ■ Patchadd and patchrm patch:106125-11 以降 ■ /kernel/drv/mm patch:106429-02 以降 ■ C++ shared library patch:105591-09 以降 ■ Euro support patch:106842-09 以降および 106841-01 以降

表 2-5 Solaris オペレーティング・システムのソフトウェア要件

ソフトウェア構成要素	要件
Solaris 7 (2.7)	<ul style="list-style-type: none">■ j2sdk-1_3_1_02-solsparc-5_7_patch.tar■ Libthread patch:106980-16 以降■ Kernal update patch:106541-16 以降■ /kernal/fs/sockfs patch:109104-04 以降■ /usr/lib/fs/fsck patch:107544-03 以降■ Motif Runtime library patch:107081-33 以降■ X Input & Output Method patch:107636-07 以降■ OpenWindows 3.6.1 Xsun patch:108376-24 以降¹■ CDE Windows manager patch:107226-17 以降■ CDE 1.3 libDT Widget patch:108374-05 以降■ Patch for replacing bad font in zh.GBK locale:107153-01 以降■ Linker patch:106950-13 以降■ Shared library for C++ patch:106300-09 以降および 106327-08 以降■ Open Windows 3.6.1 libX+Patch:107656-07 以降■ CDE 1.3:dtsession patch:107702-07 以降
Solaris 8 (2.8)	<ul style="list-style-type: none">■ j2sdk-1_3_1_02-solsparc-5_8_patch.tar■ Xsun patch:108652-33 以降■ CDE dtwm patch:108921-12 以降■ Motif 2.1 patch:108940-24 以降

¹ アジア圏のロケールの場合に必要です。
² Swing アプリケーションで繁体字中国語を表示する場合に必要です。
³ 文字コードとして ISO8859-1 または ISO8859-15 を使用するロケールの場合に必要です。

表 2-6 に、HP-UX オペレーティング・システム上で Oracle9iDS をインストールするためのソフトウェア要件を示します。HP-UX 用のパッチ・ファイルは、次の Web サイトからダウンロードできます。

<http://www.hp.com>

表 2-6 HP-UX オペレーティング・システムのソフトウェア要件

ソフトウェア構成要素	要件
HP-UX オペレーティング・システム	■ HP HP-UX 11.0
オペレーティング・システムに対するパッチ	JDK に必要なパッチをすべてインストールしてください。 注意： 以下のパッチを適用する場合、依存関係のある別のパッチもインストールする必要があります。各パッチを Web ページからダウンロードする際は、依存するパッチのリンクをクリックし、必要なものをすべてインストールしてください。 PHCO_23792 PHCO_23963 PHCO_24148 PHKL_18543 PHKL_23226 PHKL_23409 PHKL_24826 PHKL_24943 PHKL_24943 PHNE_21731 PHNE_23456 PHNE_23833 PHSS_23440 AWT を使用してアプリケーションを開発する場合は、次のパッチも必要です。 PHSS_17535 PHSS_23546 PHSS_23800
必要な実行可能コード	Oracle Universal Installer を起動するユーザーの \$PATH で定義された検索パス上に、/usr/ccs/bin/make、および cc、ld、ar、as、nm の各コードが必要です。

表 2-7 に、Linux オペレーティング・システム上で Oracle9iDS をインストールするためのソフトウェア要件を示します。

表 2-7 Linux オペレーティング・システムのソフトウェア要件

ソフトウェア構成要素	要件
Linux オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none">■ Redhat Linux 7.1 (Kernel 2.4.3-6、Glibc 2.2.2-10)■ SuSE Linux SLES7 (Kernel 2.4.7.SuSE-17、Glibc 2.2.2-55)
オペレーティング・システムに対するパッチ	binutils-2.10.91.0.4-1 (Redhat 7.1 のみ)
必要な実行可能コード	Oracle Universal Installer を起動するユーザーの \$PATH で定義された検索パス上に、/usr/ccs/bin/make、および gcc、cc、ld、ar、as、nm の各コードが必要です。 \$PATH の定義で、/usr/bin は /usr/local/bin の前に記述する必要があります。
ソフトウェア	<ul style="list-style-type: none">■ XFree86 Development 3.3.3.1 以降■ Open Motif 2.1.30

2.4 他の製品との共存

この節では、1 つの ORACLE_HOME に複数の Oracle 製品を指定する方法や、1 台のコンピュータに複数の Oracle 製品をインストールする方法について説明します。

2.4.1 ORACLE_HOME に関する注意事項

ORACLE_HOME は、Oracle ソフトウェアがインストールされるルート・ディレクトリを指します。

- Oracle9iDS リリース 2 (9.0.2) と、旧バージョン (Oracle Internet Developer Suite リリース 1) とは、同じ ORACLE_HOME に共存できません。
- Oracle9iDS リリース 2 (9.0.2) と、Oracle9i Database リリース 9.2 などの Oracle データベースとは、同じ ORACLE_HOME に共存できません。
- Oracle9iDS リリース 2 (9.0.2) と、Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2) (Oracle9iAS Infrastructure を除く) とは、同じ ORACLE_HOME に共存できます。
- **UNIX のみ** : Oracle9iDS をインストールしようとしているコンピュータに、既に ORACLE_HOME が設定されている場合は、[2.5.5.1.1 項「他の Oracle ホームとの競合回避」](#)の指示に従ってください。

2.4.2 Oracle9i Developer Suite、複数のインスタンスのインストール

Oracle9iDS リリース 2 (9.0.2) の複数のインスタンスを、同じ ORACLE_HOME にインストールすることはできません。また、Oracle Internet Developer Suite (Oracle9iDS の旧バージョン) が既にインストールされている場合に、Oracle9iDS リリース 2 (9.0.2) をインストールするには、次のガイドに従ってください。

1. 1 つめのインスタンスをインストールした後、コンピュータを再起動したかどうかを確認します (Windows のみ)。
2. 両方のインストールを行うのに十分なディスク領域があるかどうかを確認します。必要なディスク領域については、表 2-1 を参照してください。
3. 2 つめのインスタンスは、1 つめと異なる ORACLE_HOME にインストールします。
4. 最後のインスタンスをインストールした後、コンピュータを再起動します (Windows のみ)。

2.4.3 Oracle9i Developer Suite と Oracle データベースのインストール

Oracle9iDS は、Oracle データベースと同じ ORACLE_HOME に共存できません。

1. Oracle データベースをインストールした後、必ず 1 回はコンピュータを再起動します (Windows のみ)。
2. 両方のインストールに十分なディスク領域があるかどうかを確認します。必要なディスク領域については、該当する Oracle データベースのインストレーション・ガイドと、このガイドの表 2-1 を参照してください。
3. Oracle データベースと異なる ORACLE_HOME に、Oracle9iDS をインストールします。
4. 最後のインスタンスをインストールした後、コンピュータを再起動します (Windows のみ)。

2.5 インストールの準備

Oracle9iDS をインストールする前に、Oracle9i Developer Suite のリリース・ノートをお読みください。リリース・ノートは、Oracle9i Developer Suite のドキュメント CD に収録されています。最新のリリース・ノートおよびリリース・ノート Addendum は、次の Oracle Technology Network サイトから入手できます。

<http://otn.oracle.co.jp>

Oracle9iDS をインストールする前に、次の準備作業を行います。

- [全般的なチェックリスト](#)
- [ロケールの設定](#)
- [ユーザー補助機能の使用 \(Windows のみ\)](#)
- [Java Access Bridge のインストール \(Windows のみ\)](#)
- [環境変数の設定 \(UNIX のみ\)](#)
- [UNIX のアカウントおよびグループの作成](#)
- [コンポーネント別のインストール準備作業](#)
- [インストール中に必要な情報](#)
- [システムの移行またはアップグレード](#)

2.5.1 全般的なチェックリスト

- Windows NT/2000/XP Professional を稼動している場合、ローカル・マシンの Administrators グループのメンバーとしてシステムにログインしてください。
- UNIX の場合、Oracle Universal Installer の起動時に、root ユーザーとしてログインしないでください。root ユーザーとしてログインした場合、Oracle9iDS の管理は root ユーザーしか行うことができません。詳細は [2.5.6 項「UNIX のアカウントおよびグループの作成」](#) を参照してください。
- 環境変数 PATH、LD_LIBRARY_PATH、SHLIB_PATH (HP-UX のみ)、および CLASSPATH は、1024 文字以内で指定します。これを超えると、インストール中に「Word too long」というエラーが発生する可能性があります。
- Oracle のサービスおよびプロセスをすべて停止します。
- 他のアプリケーションも、すべて終了します。

2.5.2 ロケールの設定

Oracle Universal Installer は、Java Virtual Machine (JVM) が稼動している環境のロケール設定によって動作が変わります。

Windows プラットフォームでは、デフォルトのロケール設定はオペレーティング・システムの設定によって決まります。

UNIX プラットフォームでは、デフォルトのロケール設定は `LANG` の値で決まります。

Oracle Universal Installer のユーザー・インターフェイスは、現在のロケール設定に応じ、適切な言語で表示されます。ロケールは、インストーラを起動する前に設定する必要があります。

2.5.3 ユーザー補助機能の使用（Windows のみ）

スクリーン・リーダーなどのユーザー補助機能を使用して Java ベースのアプリケーションやアプレットを利用する場合は、事前に `access_setup.bat` を実行しておいてください。

`access_setup.bat` ファイルは、Disk 1 のラベルが付いた Oracle9i Developer Suite CD-ROM の、`¥install¥win32` ディレクトリにあります。

2.5.4 Java Access Bridge のインストール（Windows のみ）

スクリーン・リーダーなどのユーザー補助機能を使用して Java ベースのアプリケーションやアプレットで作業する場合、Oracle9iDS をインストールする Windows ベースのコンピュータ上のすべての Java 仮想マシンに、Sun の Java Access Bridge がインストールされている必要があります。

Oracle9iDS 用の Oracle Universal Installer を実行すると、コンピュータに JDK/JRE 1.1.8 および JDK/JRE 1.3 用のファイルがインストールされます。ただし、Java Access Bridge 1.0.2 用のファイルは、JDK/JRE 1.3 の環境にしかインストールされません。

次のいずれかを行います。

- JDK/JRE 1.1.8 がまだインストールされていない場合は、Java Access Bridge 1.0.2 のインストールを省略し、Oracle9iDS のインストール作業に進んでください。
- JDK/JRE 1.1.8 がすでにインストールされている場合は、Oracle9iDS をインストールする前に、Java Access Bridge 1.0.2 の製品バージョンを、JDK/JRE 1.1.8 のある場所にインストールする必要があります。

Java Access Bridge 1.0.2 をダウンロードしてインストールするには、次の手順を行います。

1. Java Access Bridge 1.0.2 の ZIP ファイルを、次の Web サイトからダウンロードします。
`http://java.sun.com/products/accessbridge/`
インストールと Java Access Bridge について詳細は、上記の Web サイトにある Java Access Bridge 関連ドキュメントを参照してください。
2. ダウンロードしたファイルを、たとえば `accessbridge_home` フォルダに展開します。
3. `<accessbridge_home>\installer` フォルダにある `install.exe` を実行して、Java Access Bridge をインストールします。
4. ダイアログ・ボックスに表示される各 Java 仮想マシンに、Java Access Bridge をインストールするかどうかを指定します。
5. 「Installation Completed」というメッセージが表示されると、「OK」をクリックします。

2.5.5 環境変数の設定（UNIX のみ）

以下の作業は UNIX プラットフォームのみに必要です。

2.5.5.1 ORACLE_HOME

2.5.5.1.1 他の Oracle ホームとの競合回避

Oracle9iDS のインストール時に、既存の Oracle ホーム内のソフトウェアとの競合を避けるため、環境内の既存の Oracle ホームへの参照をすべて削除する必要があります。これらの参照を削除するには、次の手順を行います。

1. 次のコマンドを使用して、既存の Oracle ホーム変数の設定を解除します。

C シェル	Bourne/Korn シェル
<code>prompt> unsetenv ORACLE_HOME</code>	<code>prompt> export ORACLE_HOME=</code>

2. `PATH`、`LD_LIBRARY_PATH`、`SHLIB_PATH`（HP-UX のみ）、および `CLASSPATH` の各環境変数を編集して、既存の Oracle ホームの値を参照しないようにします。

2.5.5.1.2 ORACLE_HOME の設定

次のコマンドを使用して、`ORACLE_HOME` 環境変数を設定します。

C シェル	Bourne/Korn シェル
<code>prompt> setenv ORACLE_HOME full_path</code>	<code>prompt> export ORACLE_HOME= full_path</code>

2.5.5.2 DISPLAY

DISPLAY 環境変数を設定すると、ローカル・ワークステーションからリモートの Oracle Universal Installer を実行できます。

Oracle Universal Installer を実行するシステムで、DISPLAY 環境変数に、ローカル・ワークステーションのシステム名または IP アドレスを設定します。

注意： PseudoColor カラー・モデルまたは PseudoColor ビジュアルをサポートする場合、PC の X エミュレータを使用してインストールを実行することもできます。PC の X エミュレータで PseudoColor ビジュアルを使用できるように設定してから、インストーラを起動してください。カラー・モデルやビジュアル設定の変更方法については、X エミュレータのドキュメントを参照してください。

インストーラの起動時に「Failed to connect to server」、「Connection refused by server」、または「Can't open display」などの Xlib エラー・メッセージが表示された場合は、ローカル・ワークステーションで次の表に示すコマンドを実行してください。

シェル・タイプ	インストーラを実行するサーバー側	ローカル・ワークステーション側
C シェル	prompt> setenv DISPLAY hostname:0.0	prompt> xhost +server_name
Bourne/Korn シェル	prompt> export DISPLAY= hostname:0.0	prompt> xhost +server_name

2.5.5.3 TMP

インストール中、スワップ用に一時ディレクトリが使用されます。このディレクトリは、Oracle9iDS のインストール前に、表 2-1 に示したハードウェア要件を満たす必要があります。十分な領域がないと、インストールに失敗することがあります。インストーラは、TMP 環境変数を参照して一時ディレクトリの場所を判断します。この環境変数が設定されていない場合、/tmp ディレクトリが使用されます。

TMP 環境変数を設定するには、次の手順を行います。

C シェル	Bourne/Korn シェル
prompt> setenv TMP full_path	prompt> export TMP= full_path

2.5.5.4 TNS_ADMIN

TNS_ADMIN は、Oracle Net 設定ファイルが格納されたディレクトリを指定する環境変数です。

システムに TNS_ADMIN を設定した場合、そのディレクトリと Oracle9iDS の Oracle Net 設定ファイルが作成されたディレクトリとが競合します。また、設定ファイルが他の Oracle 製品の Oracle ホーム以外の共通ディレクトリ内にある場合も、競合する可能性があります。たとえば、データベースのエイリアス設定用に、/var/opt/oracle/tnsnames.ora を使用する場合などです。

他の Oracle 製品用の Oracle Net 設定ファイルとの競合を避けるため、TNS_ADMIN または共通ディレクトリにある他のオラクル製品用の設定ファイルを \$ORACLE_HOME/network/admin にコピーし、TNS_ADMIN 環境変数は次のコマンドを使って設定を解除します。

C シェル	Bourne/Korn シェル
prompt> unsetenv TNS_ADMIN	prompt> export TNS_ADMIN=

2.5.6 UNIX のアカウントおよびグループの作成

以下の作業は UNIX プラットフォームのみに必要です。

2.5.6.1 Oracle Universal Installer インベントリの UNIX グループ名

オペレーティング・システム付属のユーティリティを使用して、oinstall というグループを作成します。例を示します。

- Solaris の場合、admintool または groupadd ユーティリティ。
- HP-UX の場合、SAM ユーティリティ。
- Linux の場合、YaST2 ユーティリティ。

各ユーティリティについての詳細は、オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

oinstall グループは、Oracle Universal Installer の oraInventory ディレクトリを所有します。インストールを実行する oracle ユーザー・アカウントには、oinstall グループがプライマリ・グループとして指定されている必要があります。

2.5.6.2 Oracle ソフトウェアを所有する UNIX アカウント

oracle アカウントは、システムの Oracle ソフトウェアを所有する UNIX アカウントです。Oracle Universal Installer はこのアカウントから起動する必要があります。

表 2-8 に示すように、oracle アカウントの属性を設定します。

表 2-8 oracle アカウントの属性

変数	属性
ログイン名	アカウントにアクセスする任意の名前を選択します。このドキュメントでは <code>oracle</code> アカウントという名前を使用しています。
グループ識別子	<code>oinstall</code> グループ。
ホーム・ディレクトリ	他のユーザー・ホーム・ディレクトリと同じホーム・ディレクトリを選択します。 <code>oracle</code> アカウントのホーム・ディレクトリは <code>ORACLE_HOME</code> ディレクトリと同じである必要はありません。
ログイン・シェル	デフォルトのシェルは、 <code>C</code> シェル、 <code>Bourne</code> シェル、 <code>Korn</code> シェルのいずれかです。

注意： `oracle` アカウントは、Oracle ソフトウェアのインストールおよび保守のみに使用します。Oracle Universal Installer と関係のない作業には使用しないでください。また、`root` を `oracle` アカウントとして使用しないでください。

2.5.7 コンポーネント別のインストール準備作業

Oracle9iDS をインストールする前に、コンポーネント別に必要な準備作業を行います。

2.5.7.1 Oracle9i JDeveloper

インストールの準備作業は必要ありません。

2.5.7.2 Oracle9i Business Intelligence Beans

本リリースでは、この機能はサポートされません。

2.5.7.3 Oracle9i Reports Developer

インストールの準備作業は必要ありません。

2.5.7.4 Oracle9i Discoverer Administrator

Discoverer Administration（従来の Discoverer Administration Edition）には、インストールの準備作業は必要ありません。

2.5.7.5 Oracle9i Warehouse Builder（OWB）

インストールの準備作業は必要ありません。

ただし、Warehouse Builder を有効に活用するため、次のソフトウェアをインストールおよび設定することをお勧めします。

- Oracle8i Database 8.1.7 または Oracle9i Database リリース 1 Enterprise Edition (OWB Repository、OWB Runtime Repository、OWB Browser テーブルのインストールに必要)
- オプション : Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2) (OWB Browser を実行してメタデータを表示し、メタデータ Web レポートを実行するために必要)
- Oracle9i Warehouse Builder Client。クライアント側のリポジトリと Web 用のレポート作成ツールも含まれます (Business Intelligence または完全インストール・オプションを使用します)。
- オプション : Oracle Enterprise Manager および Oracle Workflow。詳細は、『Oracle9i Warehouse Builder 構成ガイド』を参照してください。

2.5.7.6 Oracle9i Clickstream Intelligence Builder

インストールの準備作業は必要ありません。

ただし、Clickstream Intelligence Builder を有効に活用し、Oracle9iAS Clickstream の機能を拡張するため、次のソフトウェアをインストールおよび設定することをお勧めします。

- Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2)
- Oracle9i Warehouse Builder (Business Intelligence または完全インストール・オプションを使用します)
- Warehouse Builder repository (詳細は、『Oracle9i Warehouse Builder 構成ガイド』を参照)
- Oracle9iAS Discoverer (Oracle9i Application Server で使用可)
- Web ログ・データを格納するデータベース

Oracle9iAS Clickstream Intelligence の機能拡張についての詳細は、『Oracle9i Clickstream Intelligence 管理者ガイド』、および『Oracle9i Clickstream Intelligence Data Model Reference Guide』を参照してください。

2.5.7.7 Oracle9i Forms Developer

インストールの準備作業は必要ありません。

2.5.7.8 Oracle9i Software Configuration Manager (従来の Oracle Repository に相当)

インストールの準備作業は必要ありません。

ただし、Software Configuration Manager を有効に活用するため、『Oracle SCM Repository Installation Guide』をまずお読みください。これは Oracle9i Developer Suite の製品 CD に収録されています。

2.5.7.9 Oracle9i Designer

インストールの準備作業は必要ありません。

ただし、Designer を有効に活用するため、『Oracle SCM Repository Installation Guide』をまずお読みください。これは Oracle9i Developer Suite の製品 CD に収録されています。

2.5.8 インストール中に必要な情報

Oracle Universal Installer によってインストール画面が表示されます。オペレーティング・システムや選択したインストール・オプションによって、表 2-9 に示す情報が必要になります。

表 2-9 インストール中に必要な情報

項目	インストール・タイプ	例
Oracle9iDS の Oracle ホーム名とパス ¹	すべて (Windows および UNIX)	D:\¥Oracle9iDS または /private/oracle
UNIX グループ名	すべて (UNIX のみ)	devgrp
送信メール・サーバー名	Business Intelligence、Rapid Application Development、完全 (Windows および UNIX)。 注意： このメール・サーバーを使用するのは Oracle9iAS Reports Services のみです。	mysmtp01.mycorp.com
HP JDK のインストール場所	すべて (HP-UX のみ)	/opt/java/java.1.3.1.02

¹ 詳細は 2.4.1 項「ORACLE_HOME に関する注意事項」を参照してください。

2.5.9 システムの移行またはアップグレード

次のシステムから移行またはアップグレードする場合は、付録 A「移行に関する注意」を参照してください。

- Oracle Internet Developer Suite リリース 1 (Oracle9i Developer Suite の旧バージョン)
- Oracle9iDS コンポーネント (Oracle Repository など) の旧バージョン

2.6 Oracle Universal Installer について

Oracle9iDS では、Oracle Universal Installer (OUI) を使用してコンポーネントのインストールおよび環境変数の設定を行います。OUI の指示に従ってインストールを行います。

OUI には、次の作業を実行する機能が含まれています。

- 製品のインストール・オプションの検索および提供
- 既定の環境変数および構成設定の検出
- インストール中に環境変数および構成を設定
- 製品のアンインストール

2.6.1 インベントリ・ディレクトリ

OUI をコンピュータで最初に起動したとき、Inventory または oraInventory ディレクトリが作成されます。インベントリ・ディレクトリには、OUI によってコンピュータにインストールされる製品のレコードと、その他のインストール情報が保存されます。以前に Oracle 製品をインストールしたことがある場合、インベントリ・ディレクトリが既に存在する可能性があります。

- インベントリ・ディレクトリは、削除したり、手動で変更したりしないでください。コンピュータにインストール済みの製品の場所を、OUI が認識できなくなることがあります。
- Windows の場合、Inventory の場所はデフォルトで `C:\Program Files\Oracle\Inventory` に設定されています。
- UNIX の場合、oraInventory の場所は `/var/opt/oracle/oraInst.loc` に定義されています。
- 最新のログ・ファイルは、`Inventory_location\logs\installActions.log` (Windows)、または `oraInventory_location/logs/installActions.log` (UNIX) にあります。インストール・セッションのログ・ファイル名には、日付と時刻が追加されます。
- UNIX グループ名を指定するとき、そのグループに対して oraInventory ディレクトリの書き込み権限が与えられます。他のグループが OUI を実行するためには、oraInventory ディレクトリに対する書き込み権限が必要です。権限がなければインストール処理は失敗します。

2.6.2 Oracle Universal Installer の起動

Oracle Universal Installer (OUI) を起動して Oracle9iDS をインストールするには、次の手順を行います。

2.6.2.1 Windows の場合

注意： インストール中に Windows システム・ファイル・エラーが発生した場合は、「OK」をクリックしてエラー・ダイアログ・ボックスを閉じ、Windows システム・ファイルのインストールを実行してください（インストール方法については後述します）。

1. Oracle 関連のサービス（Oracle データベースなど）をすべて停止します。
2. 「Disk 1」のラベルの付いた Oracle9i Developer Suite CD-ROM を、ドライブに挿入します。
3. 自動実行機能がサポートされない場合は、CD-ROM の root ディレクトリにある setup.exe を実行し、インストーラを起動します。
4. 自動実行機能がサポートされる場合は、OUI が自動的に起動されます。「Oracle9iDS のインストール」をクリックして、OUI を起動します。
5. **Windows のユーザー補助機能を使用している場合：**CD-ROM を挿入した直後に [Shift] キーを押し、自動実行機能を使用不可にします。自動実行のウィンドウが開いた場合は、[Alt]+[F4] キーを押して閉じます。次のいずれかの操作を行います。
 - a. Oracle9iDS をインストールする場合は、CD-ROM の root ディレクトリにある setup.exe を実行して OUI を起動します。
 - b. CD-ROM の内容を確認する場合は、Windows エクスプローラを使用します。
 - c. Oracle9iDS についての情報を得る場合は、Oracle9i Developer Suite のドキュメント CD を参照します。

3.1 項「Oracle9i Developer Suite のインストール」の手順に進みます。

2.6.2.1.1 Windows システム・ファイルのインストール

Oracle9iDS では、Windows システム・フォルダ内に必要なファイルがいくつかあります。Oracle9iDS のインストール中、インストール先のシステムに既に存在するこれらのファイルが、Oracle9iDS の要件に合うかどうか確認されます。一部のファイルが要件を満たさない場合、互換性のあるバージョンで置き換えられます。

通常、置換え作業は Oracle9iDS のインストール中に行われますが、置き換えるファイルが他のプロセスで使用中であればインストール処理が中断し、エラー・メッセージが表示されます。これは、更新したファイルを有効にするには、Windows を再起動する必要があるからです。Oracle9iDS のインストール処理は、途中でシステムの再起動によって中断できません。

Oracle9iDS には、必要な Windows システム・ファイルの補足インストールも含まれています。システム・ファイルをインストールした後、必要に応じて Windows が再起動されます。

Oracle9iDS のインストール中に Windows システム・ファイル・エラーが発生した場合、「OK」をクリックしてダイアログ・ボックスを閉じ、次の手順に従って Windows システム・ファイルのインストールを実行します。Windows システム・ファイルのインストールを実行しないと、Oracle9iDS のインストールを続行できません。

Windows システム・ファイルをインストールするには、次の手順を行います。

1. 「終了」をクリックして、Oracle9iDS のインストールを終了します。
2. Oracle9i Developer Suite CD-ROM のルート・ディレクトリに切り替えます。
3. `wsf.exe` を実行します。

既存の Oracle ホームを利用して Windows システム・ファイルのインストールが実行されます。これがない場合は、OUIHome という名前でホームが作成されます。

必要に応じて自動的に Windows が再起動されます。または、「インストール終了」ダイアログ・ボックスが表示されないで Windows システム・ファイルのインストールは終了します。

4. Windows の再起動、あるいは Windows システム・ファイルのインストールが終了したら、Oracle9iDS のインストールを再開してください。

2.6.2.2 UNIX の場合

注意： root アカウントへのアクセスが必要です。

CD-ROM の自動マウント機能をサポートしないオペレーティング・システムでは、Oracle9i Developer Suite のインストール CD-ROM を手動でマウントする必要があります。CD-ROM のマウント/アンマウントには、root 権限が必要です。CD-ROM ドライブから CD-ROM ディスクを取り除く前に、必ずアンマウントしてください。

1. Oracle 関連のプロセス（Oracle データベースなど）をすべて停止します。
2. インストール CD-ROM をマウントします。

Oracle9i Developer Suite のインストール CD-ROM は、RockRidge 形式で作成されています。プラットフォームに応じ、該当する項を参照してください。

- [CD-ROM のマウント手順 : Solaris の場合](#)
- [CD-ROM のマウント手順 : HP-UX の場合](#)
- [CD-ROM のマウント手順 : Linux の場合](#)

2.6.2.2.1 CD-ROM のマウント手順 : Solaris の場合

Solaris Volume Management ソフトウェアを使用している場合（デフォルトで Solaris オペレーティング・システムにインストールされます）、CD-ROM ドライブに CD-ROM ディスクを挿入すると、cdrom/Disk1 として自動的にマウントされます。

Solaris Volume Management を使用していない場合は、手動で CD-ROM をマウントする必要があります。

Disk 1 CD-ROM をマウントするには、次の手順を行います。

1. Oracle9i Developer Suite CD-ROM Disk 1 を、CD-ROM ドライブに挿入します。
2. root ユーザーとしてログインします。
3. CD-ROM のマウント・ポイントとなるディレクトリを作成します。

```
prompt> mkdir mount_point
```

4. 作成したマウント・ポイントに CD-ROM をマウントします。

```
prompt> mount options device_name mount_point
```

次の例は、Solaris Volume Management ソフトウェアを使用せずに、CD-ROM を手動で /cdrom にマウントする手順を示します。root ユーザーとして次のコマンドを実行します。

```
prompt> mkdir /cdrom
prompt> mount -r -F hsfs device_name /cdrom
```

5. root ユーザーとしてログアウトします。
6. [2.6.2.2.4 項「Oracle Universal Installer の実行」](#) の手順に進みます。

2.6.2.2.2 CD-ROM のマウント手順 : HP-UX の場合

1. 次のコマンドを使用して、device_file を調べます。

```
prompt> ioscan -fun -C disk
```

2. CD-ROM デバイス用のエントリが /etc/pfs_fstab ファイルに存在しない場合、これを追加する必要があります。root ユーザーとしてシステム・エディタを使用し、次の書式で /etc/pfs_fstab ファイルに行を追加してください。

```
device_file mount_point filesystem_type translation_method
```

最初のエントリは CD-ROM デバイス、2 番目のエントリはマウント・ポイントを指し、3 番目のエントリは CD-ROM を Rockridge 拡張付きの ISO9660 形式でマウントすることを指定しています。たとえば、CD-ROM デバイスのパスが /dev/dsk/c4t2d0 の場合、次のように入力します。

```
/dev/dsk/c4t2d0 /SD_CDROM pfs-rrip xlat=unix 1 0
```

3. root ユーザーとしてログインします。
4. 次のコマンドを入力します。

```
prompt> nohup /usr/sbin/pfs_mountd &
prompt> nohup /usr/sbin/pfsd &
```
5. Oracle9i Developer Suite Disk 1 CD-ROM をドライブに挿入し、次のコマンドを入力して CD-ROM をマウントします。

```
prompt> /usr/sbin/pfs_mount /SD_CDROM
```
6. root ユーザーとしてログアウトします。
7. [2.6.2.2.4 項「Oracle Universal Installer の実行」](#) の手順に進みます。

2.6.2.2.3 CD-ROM のマウント手順 : Linux の場合

オート・マウント用ソフトウェアを使用している場合、「Disk 1」のラベルの付いた CD-ROM をドライブに挿入すると、CD-ROM はオート・マウント構成で指定されたディレクトリに自動的にマウントされます。

オート・マウント用ソフトウェアを使用しない場合、CD-ROM を手動でマウントする必要があります。

Disk 1 CD-ROM をマウントするには、次の手順を行います。

1. Oracle9i Developer Suite Disk 1 CD-ROM を、CD-ROM ドライブに挿入します。
2. root ユーザーとしてログインします。
3. 必要に応じて、次のコマンドを使用して CD-ROM のマウント・ポイント・ディレクトリを作成します。

```
prompt> mkdir mount_point
```

4. 作成したマウント・ポイントに CD-ROM をマウントします。

```
prompt> mount options device_name mount_point
```

次の例は、Linux のオート・マウント用ソフトウェアを使用せずに、CD-ROM を /cdrom に手動でマウントする手順を示します。root ユーザーとして次のコマンドを実行します。

```
prompt> mkdir /cdrom
prompt> mount -t iso9660 /dev/cdrom /cdrom
```

5. root ユーザーとしてログアウトします。
6. [2.6.2.2.4 項「Oracle Universal Installer の実行」](#) の手順に進みます。

2.6.2.2.4 Oracle Universal Installer の実行

インストール CD-ROM をマウントした後、CD-ROM から Oracle Universal Installer (OUI) を実行できます。

CD-ROM から Oracle Universal Installer を実行するには、次の手順を行います。

注意： Oracle Universal Installer を起動するときは、root ユーザーとしてログインしないでください。root ユーザーとしてログインして Oracle Universal Installer を起動すると、root ユーザー以外は Oracle9iDS の管理を行えなくなります。

1. oracle ユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力して OUI を起動します。

```
prompt> mount_point/Disk1/runInstaller
```

Oracle Universal Installer が起動され、Oracle9iDS のインストールが開始します。[3.1 項「Oracle9i Developer Suite のインストール」](#)の手順に進みます。

インストール手順

この章で説明するインストール処理を行う前に、[第2章「インストールする前に」](#)を参照して、必要な準備作業を完了しておいてください。

インストール処理およびその後の作業について、手順を追って説明します。説明する項目は次のとおりです。

- [Oracle9i Developer Suite のインストール](#)
- [インストール完了後の作業](#)

3.1 Oracle9i Developer Suite のインストール

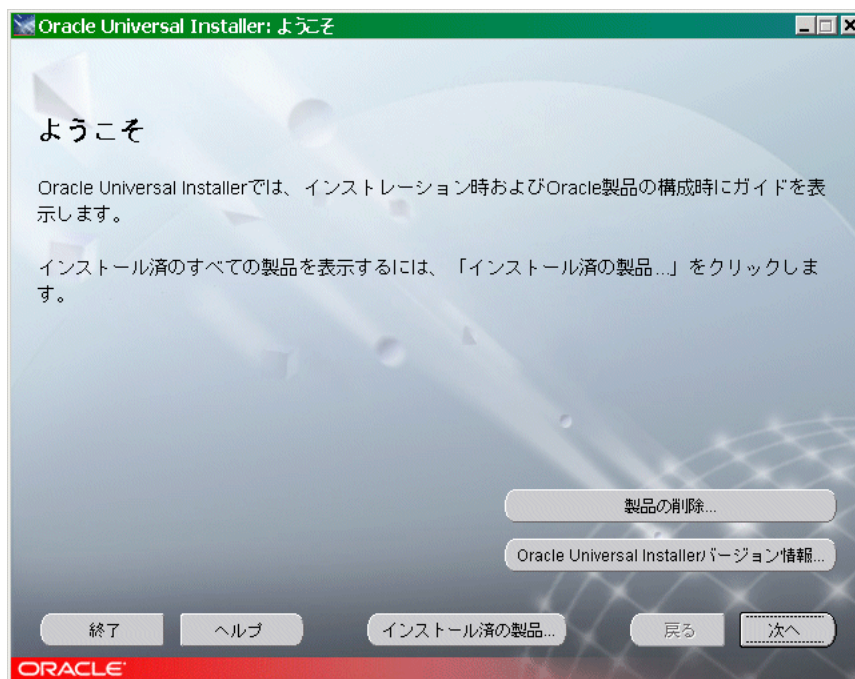
Oracle Universal Installer (OUI) の画面は、現在のロケールに指定された言語で表示されます。OUI の起動方法については、[2.6.2 項「Oracle Universal Installer の起動」](#)を参照してください。

注意：（Windows のみ） インストール中に Windows システム・ファイル・エラーが発生した場合は、「OK」をクリックしてエラー・ダイアログ・ボックスを閉じ、[2.6.2.1.1 項「Windows システム・ファイルのインストール」](#)の手順に従ってください。

Oracle Universal Installer が起動すると、「ようこそ」画面が表示されます。

1. 「Oracle Universal Installer : ようこそ」画面に表示された内容を確認し、「**次へ**」をクリックします。

図 3-1 「ようこそ」画面



「ようこそ」画面には、Oracle Universal Installer (OUI) に関する情報が記載されています。

「ようこそ」画面および OUI の各画面には、次のボタンが表示されます。

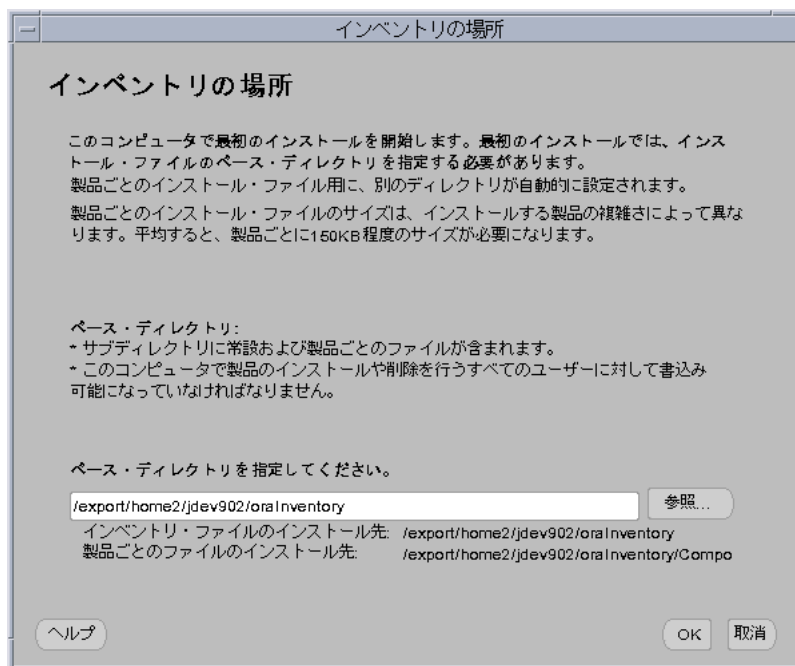
- **終了**: インストール処理を停止し、OUI を終了します。
- **ヘルプ**: 各画面の機能についての説明を表示します。
- **インストール済の製品**: 現在インストール済みの製品の表示やアンインストールを行います。
- **戻る**: 前の画面に戻ります。
- **次へ**: 次の画面に進みます。

「ようこそ」画面には、上記以外にも次の 2 つのボタンが表示されます。

- **製品の削除**: 製品を個別に指定して、あるいはすべてまとめて削除します。
- **Oracle Universal Installer バージョン情報**: OUI のバージョン番号を表示します。

2. (最初のインストール時のみ) 「インベントリの場所」画面で、ファイルのインストール先となるベース・ディレクトリを確認します。「OK」をクリックして続行します。

図 3-2 「インベントリの場所」画面



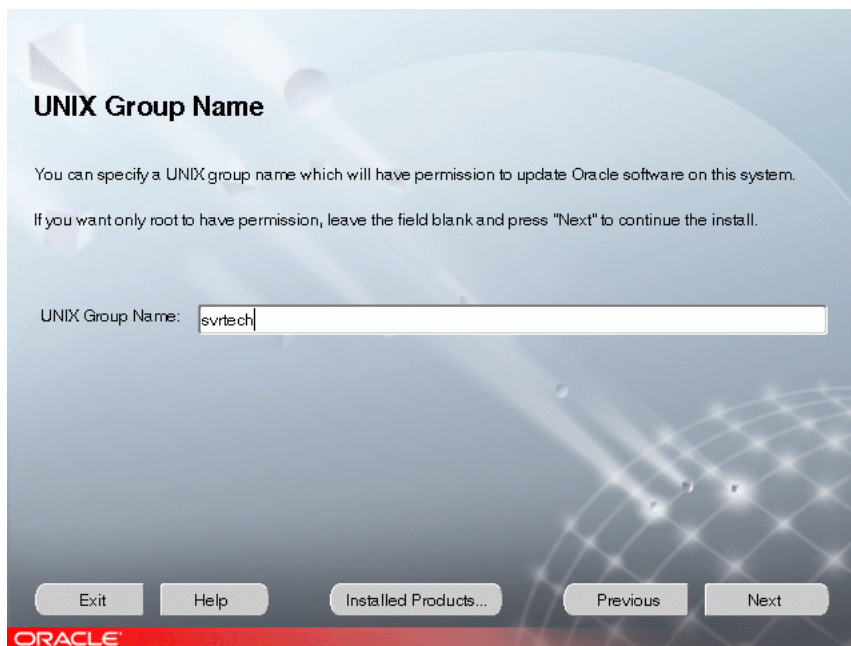
「インベントリの場所」画面は、そのコンピュータに初めてインストールするときのみ表示されます。この画面を使用して、ファイルのインストール先ベース・ディレクトリを設定します。デフォルト値のままでも、他のディレクトリを指定しても構いません。

ベース・ディレクトリのサブディレクトリには、永続ファイルと各製品別のファイルが含まれています。そのコンピュータで製品のインストールやアンインストールを行うすべてのユーザーに対して、書き込み許可を与える必要があります。

- Windows の場合、デフォルトのベース・ディレクトリは C:¥Program Files¥Oracle¥Inventory です。各製品別のファイルは、ベース・ディレクトリのサブディレクトリ（たとえば、C:¥Program Files¥Oracle¥Inventory¥Components）に自動的に格納されます。
- UNIX の場合、ベース・ディレクトリの場所（たとえば、/private1）を入力します。各製品別のファイルは、ベース・ディレクトリのサブディレクトリ（たとえば、/private1/Components）に自動的に格納されます。
- **参照:** ファイル・システムを参照してベース・ディレクトリを指定する場合は、「参照」ボタンをクリックします。

3. **UNIX のみ**：(最初のインストール時のみ) 「UNIX Group Name」画面で UNIX グループ名を入力し、「次へ」をクリックします。

図 3-3 「UNIX Group Name」画面



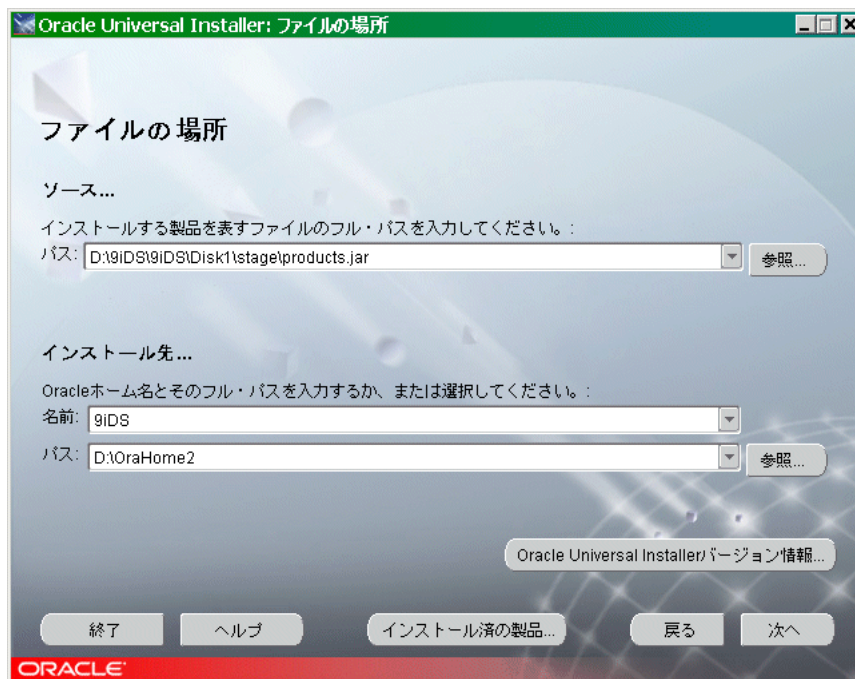
「UNIX Group Name」画面は、そのコンピュータで初めて Oracle Universal Installer を起動したときにのみ表示されます。この画面を使用して、指定したグループが oraInventory ディレクトリにアクセスできるよう設定します。詳細は [2.5.6 項「UNIX のアカウントおよびグループの作成」](#) を参照してください。

- **Unix Group Name:** Oracle9iDS のインストール設定を行う権限を持った UNIX グループ名を入力します。自分が属するグループ名は、インストーラを起動した UNIX プロンプトから次のコマンドを入力して確認できます。

```
prompt> id
```

- インストールを続行する前に、root 権限で実行しなくてはならないアクションがあります。orainstRoot.sh ファイル内に格納されているシェル・スクリプトを root 権限で実行します（シェル・スクリプトを実行するとき、orainstRoot.sh の前に「./」を入力する必要がある場合もあります）。「orainstRoot.sh」インストール画面には、orainstRoot.sh ファイルの場所が表示されます。以降のインストール処理でコンポーネントを識別できるように、このスクリプトによって、システムにインストールされたコンポーネントへのポインタが作成されます。oraInventory ディレクトリへのポインタは、スクリプトによって生成される /var/opt/oracle/oraInst.loc ファイルに記録されます。
- Bourne シェル・スクリプトを実行し、インストール処理を続行します。
4. 「ファイルの場所」画面で、インストール元およびインストール先のパスを確認し、Oracle ホーム名を入力または選択します。「次へ」をクリックして続行します。

図 3-4 「ファイルの場所」画面



「ファイルの場所」画面で、インストール元およびインストール先を絶対パスで入力します。

- **ソース**: `products.jar` ファイルの絶対パスで、この場所からインストールを行います。インストール・プログラムの `products.jar` ファイルのデフォルト値が検出されて使用されます。パスを変更しないでください。
- **インストール先**: Oracle ホームの名前および絶対パスで、この場所に製品がインストールされます。

デフォルトの名前およびパスを使用しても、他の名前を選択しても構いません。詳細は [2.4.1 項「ORACLE_HOME に関する注意事項」](#) を参照してください。

UNIX の場合、[2.5.5.1 項「ORACLE_HOME」](#) に設定された Oracle ホームがデフォルトとして使用されます。

注意： Oracle ホームは、実在する絶対パスでなければなりません。環境変数名や空白を含むことはできません。

- **参照**: ファイル・システムを参照してインストール元あるいはインストール先のディレクトリを指定する場合は、「参照」ボタンをクリックします。

次の既存のディレクトリを、Oracle9iDS のインストール先として指定しないでください。

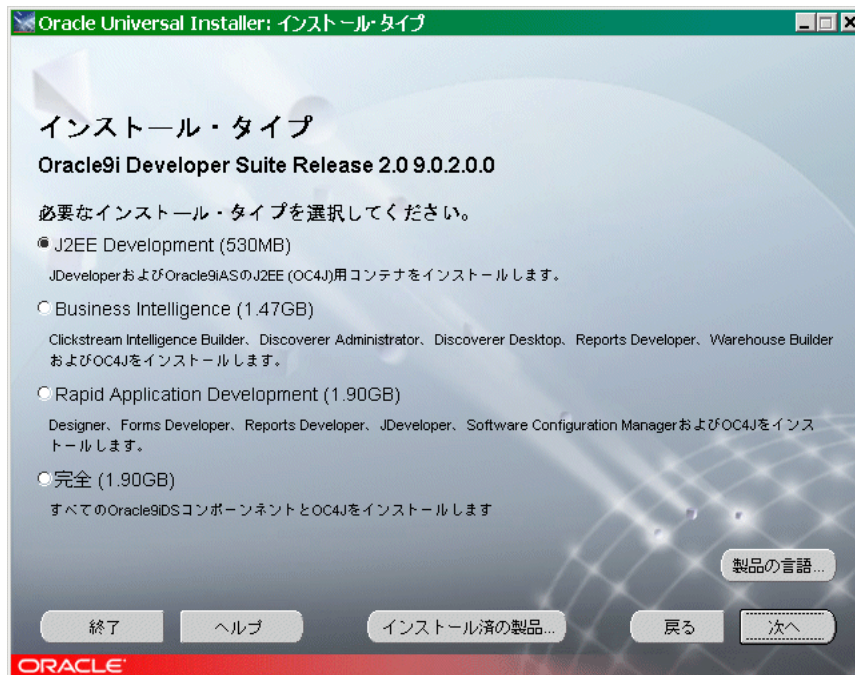
- Oracle Internet Developer Suite (Oracle9iDS の旧リリース) のホーム・ディレクトリ
- Oracle データベース (Oracle8i、Oracle9i を含む) のホーム・ディレクトリ

別のインストール・オプションを選択してインストールする場合、または更新する場合を除き、既存の Oracle9iDS のホーム・ディレクトリに新たに Oracle9iDS をインストールしないでください。

Oracle ホームについての詳細は、[2.4 項「他の製品との共存」](#) を参照してください。

5. 「インストール・タイプ」画面で、実行するインストールのタイプ、およびインストールする製品言語を選択します。「次へ」をクリックして続行します。

図 3-5 「インストール・タイプ」画面 (Windows)



「インストール・タイプ」画面で、実行するインストールのタイプ、およびインストールする製品言語を選択します。

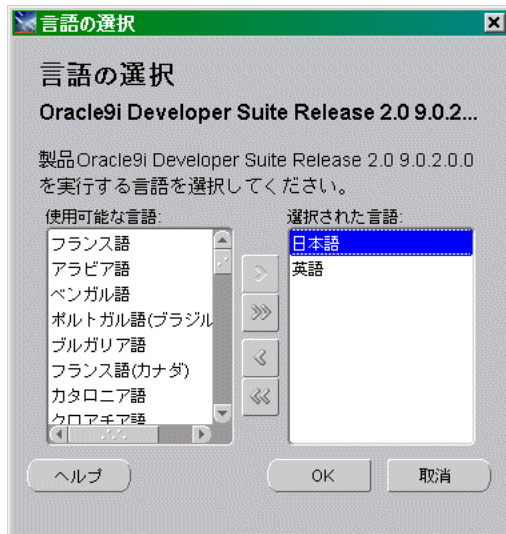
使用可能なインストール・オプションは次のとおりです。

- **J2EE Development:** Oracle9i JDeveloper およびそのサブコンポーネント（UIX、Bali、XDK）と、Oracle9iAS Containers for J2EE（OC4J）をインストールします。OC4J は、テスト用のデフォルトのリスナーとして設定されます。
- **Business Intelligence:**（Windows のみ）Oracle9i Warehouse Builder、Oracle9i Discoverer Administrator（Oracle9i Discoverer Desktop を含む）、Oracle9i Clickstream Intelligence Builder、Oracle9i Reports Developer をインストールします。さらに、OC4J および Oracle9iAS Reports Services もインストールします。OC4J はテスト用のデフォルトのリスナーとして設定されます。
- **Rapid Application Development:**（Windows のみ）Oracle9i Forms Developer、Oracle9i Designer、Oracle9i Software Configuration Manager、Oracle9i Reports Developer、Oracle9i JDeveloper をインストールします。さらに、OC4J、Oracle9iAS Reports Services、Oracle9iAS Forms Services もインストールします。OC4J はテスト用のデフォルトのリスナーとして設定されます。
- **完全:** Oracle9iDS のコンポーネントをすべてインストールします。ただし、UNIX の場合、使用できないコンポーネントがあります。UNIX の場合にインストールされる Oracle9iDS のコンポーネントについては、表 2-3「オペレーティング・システムと Oracle9iDS コンポーネント」を参照してください。

製品の言語: インストールした製品の実行時に表示される言語を選択します。「製品の言語」ボタンをクリックして「言語の選択」画面を表示します。複数の製品言語をインストールし、NLS_LANG 環境変数を変更して、製品のユーザー・インタフェース言語を実行時に切り替えることもできます。製品の実行時に、該当する言語の翻訳ファイルが使用可能であり、インストールした言語ファイルがそれぞれ正しくマップされていれば、製品は現在のロケール設定に従って動作します。そうでない場合は、英語で表示されます。

6. 「言語の選択」画面で、インストールした製品の実行時に表示する言語を選択し、「OK」をクリックして続行します。

図 3-6 「言語の選択」画面



「言語の選択」画面で、インストールする言語を複数選択できます。

- **使用可能な言語**: 選択可能な言語が表示されます。インストールする言語をクリックします。複数の言語を選択できます。言語を選択した後、「>」または「>>」ボタンをクリックすると、選択した言語が右側の「選択された言語」リストに移動します。なお、ここで選択した言語は、インストール・プログラムの表示言語とは関係ありません。
- **選択された言語**: インストールするために選択した言語が表示されます。デフォルトで、English および現在のロケール言語が表示されています。選択を取り消したいときは、その言語をクリックして、「<」または「<<」ボタンをクリックします。選択した言語が左側の「使用可能な言語」リストに戻ります。

7. 「Outgoing Mail Server 情報の指定」画面で、送信用メール・サーバーを指定します。「次へ」をクリックして続行します。

図 3-7 「Outgoing Mail Server 情報の指定」画面

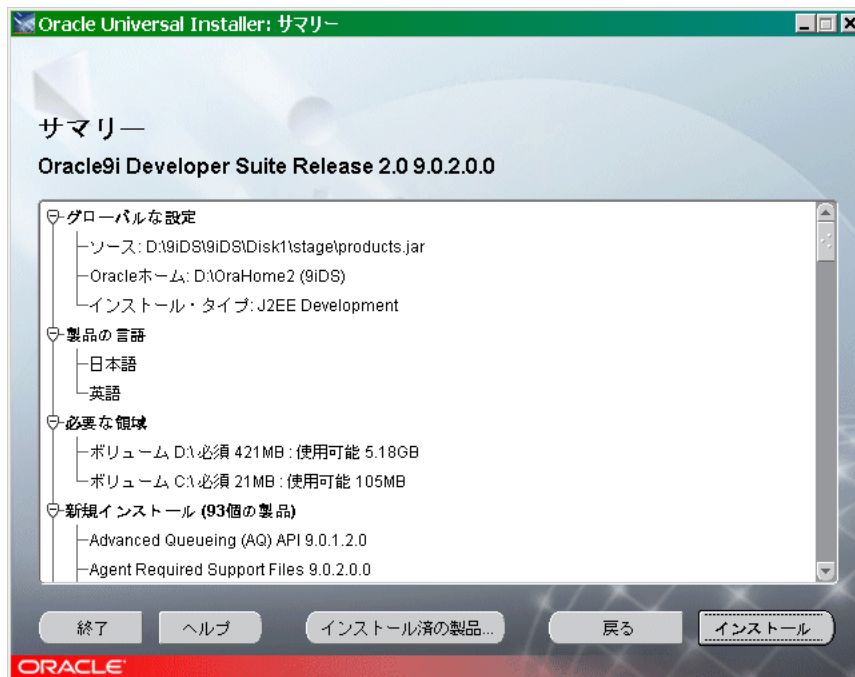


Oracle9i Designer を使用して Oracle Reports を生成する場合、送信用メール・サーバー名を指定する必要があります。

「Outgoing Mail Server 情報の指定」画面は、インストール・オプションとして Business Intelligence、Rapid Application Development、完全のいずれかを選択した場合にのみ表示されます。Oracle9i Reports Services が電子メールで報告書を配布するための送信用メール・サーバー名を、たとえば「mysmtp01.mycorp.com」のように指定してください。このメール・サーバーは、ユーザーからの要求に応じ、Oracle9i Reports Services がジョブ完了通知を送信するためにも使用されます。

- 「サマリー」画面の情報を確認し、「インストール」をクリックします。ファイルのインストールが開始されます。

図 3-8 「サマリー」画面の例



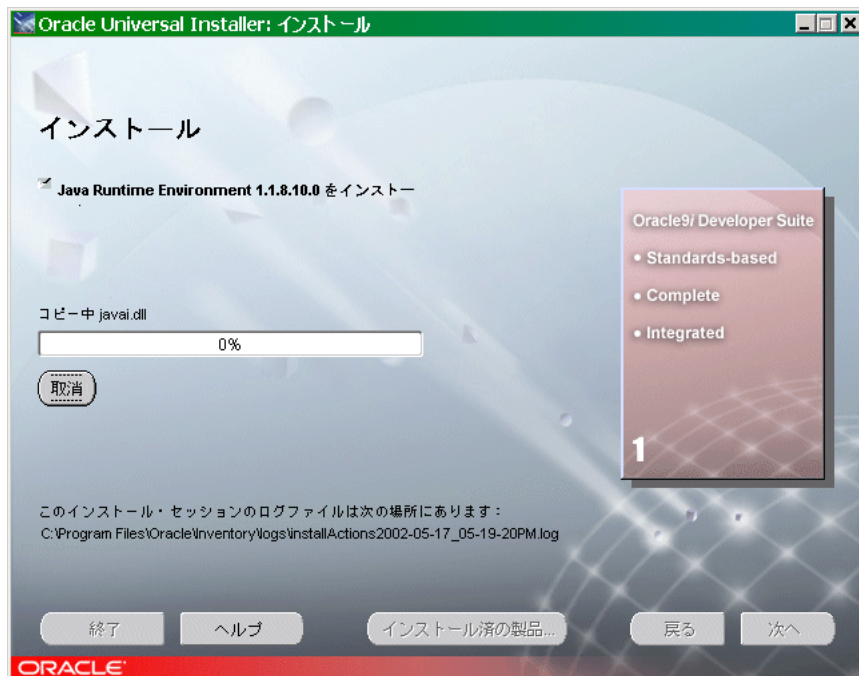
実際のインストール処理を開始する前に、「サマリー」画面で設定した内容を確認できます。「サマリー」リストには、インストール元およびインストール先の場所、インストール・タイプ、製品言語のほか、必要なディスク領域や、インストールされるコンポーネントがまとめられています。

設定を変更するには、「戻る」をクリックして適切な画面に戻ります。

注意： ディスク領域が不足している場合、「必要な領域」に赤字で表示されます。

9. 「インストール」画面が表示され、必要な Oracle9iDS ファイルのコピーが開始されます。インストールの進行状況も表示されます。

図 3-9 「インストール」画面の例

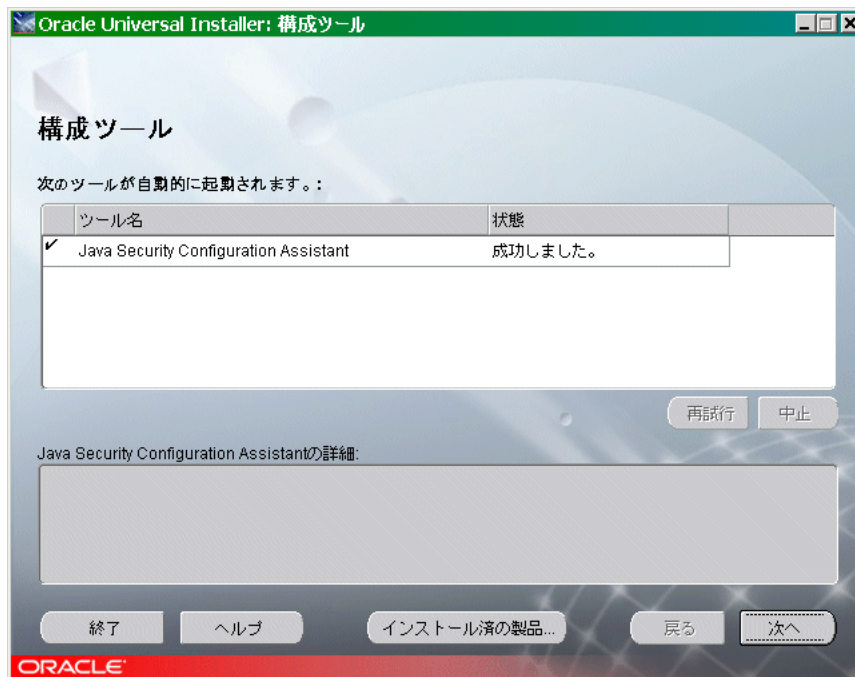


製品のインストール処理中は「インストール」画面が表示されています。インストール処理には、ファイルのコピーやリンク、実行決定ポイント、計算などのアクションの実行が含まれます。この画面では次の操作を行います。

- インストール処理の進行を監視する。
- インストール・ログ・ファイルの完全パスを確認する。インストール・ログ・ファイルについての詳細は、[2.6.1 項「インベントリ・ディレクトリ」](#)を参照してください。
- 「取消」をクリックしてインストール処理を中断する。この場合、製品すべてのインストールを停止する（デフォルト）か、特定のコンポーネントのみのインストールを停止するかを選択できます。通常は、製品すべてのインストールを停止するようお勧めします。特定のコンポーネントのインストールのみを停止した場合、これに関連するコンポーネントが正常に動作しなくなるかもしれません。

10. 「構成ツール」画面は、インストール・オプションとして Business Intelligence、Rapid Application Development、Complete のいずれかを選んだ場合에만のみ表示されます。

図 3-10 「構成ツール」画面



「構成ツール」画面は、Oracle Net Configuration Assistant の実行中に表示されます。基本的なネットワーク・コンポーネントを設定し、tnsnames.ora および sqlnet.ora ファイルを作成します。Oracle Net Configuration Assistant ツールは、インストーラによって自動的に起動されます。Oracle Net Configuration Assistant の「ようこそ」画面にある「ヘルプ」をクリックすると、このツールの使用方法についての説明が表示されます。

「構成ツール」画面では次の操作を行います。

- 設定処理を監視する。
- 「中止」をクリックして構成ツールを終了する。
- 構成ツールによって指定された設定値を表示する。構成ツール名をクリックすると、設定値の詳細が表示されます。

- 設定が正常に完了しなかった場合、「再試行」をクリックして構成ツールを再度実行する。

Windows のユーザー補助機能を使用している場合：ユーザー補助機能を使用していて、スクリーン・リーダーに何か問題が発生した場合は、次の操作を行います。

- [ALT]+[F4] を押して Net Configuration Assistant の処理を中断し、OUI を終了します。この操作は Oracle9iDS のインストール処理には影響ありません。Net Configuration Assistant ツールが終了するのみです。
- Java Access Bridge 1.0.2 を、JRE 1.1.8 のある場所にインストールします。Java Access Bridge 1.0.2 のダウンロードやインストール手順については、[2.5.4 項「Java Access Bridge のインストール \(Windows のみ\)」](#)を参照してください。
- 次の環境変数を設定します。

```
ORACLE_OEM_CLASSPATH=<drive_letter>:%Program
Files%Oracle%jre%1.1.8%lib%access-bridge.jar;<drive_
letter>:%Program Files%Oracle%jre%1.1.8%lib%jaccess.jar
```

ここで <drive_letter> は C、D など、「Program Files」というディレクトリが格納されているドライブを表します。

- スクリーン・リーダーを再起動します。
- Windows の「スタート」メニューから、次の順に選択して Net Configuration Assistant ツールを再起動します。
「スタート」→「プログラム」→「Oracle - IDSHome」→「Configuration and Migration Tools」→「Net Configuration Assistant」

11. UNIX のみ : root.sh の実行

必要なファイルのコピーが終わると、root.sh スクリプトを実行するようプロンプトで指示されます。root.sh スクリプトを実行するには、次の手順を行います。

- root ユーザーとしてログインします。
- Oracle ホーム・ディレクトリにある root.sh スクリプトを、次のように実行します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/root.sh
```

- 処理が完了したら root ユーザーからログアウトします。

「Finished running generic part of the root.sh script」および「Now product-specific root actions will be performed」というメッセージが表示されたら、root ユーザーからログアウトし、「Install」画面に戻ってください。

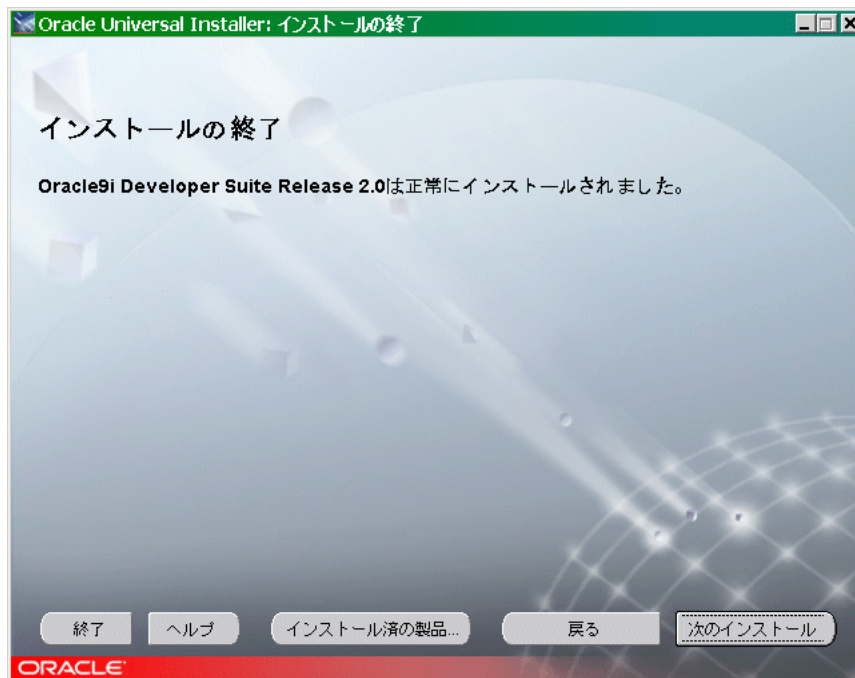
root.sh スクリプトは、次の情報を調べます。

- ORACLE_OWNER、ORACLE_HOME、ORACLE_SID の各環境変数の値。

- ローカルの bin ディレクトリの絶対パス。デフォルト値のままでも、別のローカル bin ディレクトリを指定しても構いません。

12. 製品のインストールが終了すると、「インストールの終了」画面が表示されます。

図 3-11 「インストールの終了」画面



「インストールの終了」画面は、インストール処理の終了時に表示され、インストール処理が成功したか失敗したかを示します。

- **終了**: インストールプログラムを終了するには、「終了」をクリックします。インストール・プログラムの終了を確認するダイアログ・ボックスが表示されます。「はい」をクリックして終了するか、「いいえ」をクリックしてインストール・プログラムを続行します。
- **次のインストール**: インストール・プログラムを続行するには、「次のインストール」をクリックします。

製品のインストールに成功した場合は、[3.2 項「インストール完了後の作業」](#)を参照して次の手順に進んでください。

3.2 インストール完了後の作業

Oracle9iDS のインストール完了後に必要な作業を、次の項に分けて説明します。

- 全般的なチェックリスト
- 各コンポーネントのインストール完了後の作業
- その他のドキュメント

注意： 特に断らない限り、ORACLE_HOME は、インストール処理中に使用した Oracle9iDS の Oracle ホーム・ディレクトリを表します。

3.2.1 全般的なチェックリスト

インストール完了後の全般的なチェックリストを確認し、必要な作業を行います。

3.2.1.1 NLS

インストール中に選択した製品言語に応じ、コンポーネントごとに必要な翻訳ファイルがインストールされます。コンポーネントの実行時の言語を変更するには、NLS_LANG に適切な言語を設定します。

NLS_LANG は、言語、地域、文字セットを設定する環境変数で、実行時に参照されます。NLS_LANG は次の 3 つのパラメータで構成されます。

```
<language>_<territory>.<character set>
```

たとえば、NLS 環境変数を

```
Japanese_Japan.JA16EUC
```

と設定すると、日本語環境でコンポーネントが実行されます。また、日本における表記法などの慣習に従い、データを操作する文字セットとしては EUC を使用することを表します。

NLS_LANG 値についての詳細は、『Oracle9i Application Server グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。

3.2.1.2 TNS 名

選択したインストール・オプションにもよりますが、tnsnames.ora および sqlnet.ora ファイルが、%ORACLE_HOME%\network\admin ディレクトリ (Windows の場合) または \$ORACLE_HOME/network/admin ディレクトリ (UNIX の場合) にインストールされます。このファイルは、テキスト・エディタを使用して手動で更新することも、構成ツールである Oracle Net Configuration Assistant を使用して更新することもできます。構成ツールについての詳細は、『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』または『Oracle8i Net8 管理者ガイド』を参照してください。

3.2.1.3 ポート番号

Oracle9iDS コンポーネントのインストール処理の過程で、ポートの割り当てを記述したファイルが作成されます。インストール処理においてポート番号の競合が自動的に検出され、コンポーネントに割り当てられた範囲内で代替りのポートを選択します。

portlist.ini ファイルが、%ORACLE_HOME%\install ディレクトリ (Windows) または \$ORACLE_HOME/install ディレクトリ (UNIX) にあります。このファイルには、「ポート名 = ポート値」という形式で、コンポーネントごとのポート割当てが記述されています。以下に例を示します。

```
Oracle Java Object Cache port = 7000
Oracle Intelligent Agent = 1748, 1754, 1808, 1809
```

表 3-1 に、インストール中にコンポーネントの選択に使用される、デフォルトのポート番号を示します。

表 3-1 ポート番号

コンポーネント	デフォルトのポート番号	ポート番号の範囲
OC4J (JDeveloper のテスト用)		
■ HTTP リスナー	8988	8988 - 8998
■ RMI	23891	23891-23901
■ JMS	9227	9227 - 9237
OC4J (Forms Developer および Reports Developer のテスト用)	8888	なし
■ HTTP リスナー		

3.2.1.4 OC4J Instance for Oracle9iDS

- Forms Developer および Reports Developer のテスト用に、Oracle9iDS OC4J を起動または停止するには、\$ORACLE_HOME/j2ee/Oracle9iDS ディレクトリにある次のスクリプトを使用します。

- startinst.sh または startinst.bat
- stopinst.sh または stopinst.bat

Windows の場合、次の順に選択して「スタート」メニューからスクリプトを起動することもできます。

「スタート」->「プログラム」->「Oracle9i Developer Suite - ORACLE_HOME」

3.2.1.5 ユーザー補助機能（Windows のみ）

スクリーン・リーダーなどのユーザー補助機能を使用して Java ベースのアプリケーションやアプレットで作業する場合、Oracle9iDS をインストールした Windows ベースのコンピュータ上のすべての Java 仮想マシンに、Sun の Java Access Bridge がインストールされている必要があります。

Oracle9iDS 用の Oracle Universal Installer を実行すると、コンピュータに JDK/JRE 1.1.8 および JDK/JRE 1.3 用のファイルがインストールされます。ただし、Java Access Bridge 1.0.2 用のファイルは、JDK/JRE 1.3 の環境にしかインストールされません。

JDK/JRE 1.1.8 のもとで動作する Oracle9iDS のコンポーネントについてユーザー補助機能を活用するためには、製品版の Java Access Bridge 1.0.2 を、JDK/JRE 1.1.8 の側にもインストールする必要があります。インストール手順については、[2.5.4 項「Java Access Bridge のインストール（Windows のみ）」](#)を参照してください。Java Access Bridge をインストールしたら、次の手順でファイルが正しく設定されているかどうかを確認します。

Java Access Bridge のファイルがインストールされたことの確認:

以下の手順は、Java Access Bridge 1.0.2 の ZIP ファイルをダウンロードし、accessbridge_home という名前の一時ディレクトリに展開して、インストールが済んでいることを仮定しています。詳細は [2.5.4 項「Java Access Bridge のインストール（Windows のみ）」](#)を参照してください。

1. jar ファイル access-bridge.jar および jaccess.jar が、Program Files¥Oracle¥jre¥1.1.8¥lib および Program Files¥Oracle¥jre¥1.3.1¥lib¥ext の両方のフォルダに追加されたことを確認します。
2. 2 つの DLL ファイル JavaAccessBridge.dll および WindowsAccessBridge.dll が、システム・パスである Winnt¥System32 フォルダに追加されたことを確認します。
3. jar ファイル access-bridge.jar および jaccess-1_3.jar が、%ORACLE_HOME%¥jdk¥jre¥lib¥ext フォルダに追加されたことを確認します。追加されなかった場合は、<accessbridge_home>¥installer¥installerFiles からコピーします。
4. 2 つの DLL ファイル JavaAccessBridge.dll および WindowsAccessBridge.dll が、%ORACLE_HOME%¥jdk¥jre¥lib¥ext フォルダに追加されたことを確認します。追加されなかった場合は、<accessbridge_home>¥installer¥installerFiles からコピーします。
5. PATH 環境変数に、DLL ファイルをインストールしたディレクトリである %ORACLE_HOME%¥jdk¥jre¥lib¥ext が追加されたことを確認します。
6. ORACLE_OEM_CLASSPATH 環境変数に、JRE 1.1.8 用にインストールした Access Bridge ファイルの場所である、ORACLE_OEM_CLASSPATH=<drive_letter>:¥Program Files¥Oracle¥jre¥1.1.8¥lib¥access-bridge.jar;<drive_

letter>:¥Program Files¥Oracle¥jre¥1.1.8¥lib¥jaccess.jar が追加されたことを確認します。

7. フォルダ %ORACLE_HOME%¥jdk¥jre¥lib および Program Files¥Oracle¥jre¥1.3.1¥lib 内のファイル accessibility.properties に、次のような記述があることを確認します。

assistive_technologies=com.sun.java.accessibility.AccessBridge

ない場合は、<accessbridge_home>¥installer¥installerFiles から適切なフォルダに、ファイルをコピーします。

3.2.2 各コンポーネントのインストール完了後の作業

各コンポーネントのインストール完了後のチェックリストを示します。確認の上、必要な作業を行ってください。

なお、以降の作業を行う前に、必ずリリース・ノートをご確認ください。リリース・ノートには、日本語環境で行うべき追加のインストール手順が記載されています。

3.2.2.1 Oracle9i JDeveloper

JDeveloper を有効に活用できるよう、以下に述べる作業を行ってください。対応するデプロイ環境については、[B.1 項「Oracle9i JDeveloper」](#)を参照してください。

3.2.2.1.1 JDeveloper の WebDAV 対応の有効化

JDeveloper の WebDAV に対応するには、US-OTN から JDeveloper 用 WebDAV アドインをダウンロードする必要があります。WebDAV アドインには IBM の DAV4J ドライバも含まれています。

JDeveloper 用 WebDAV アドインをダウンロードするには、次の手順を行います。

1. Web ページ
<http://otn.oracle.com/software/products/jdev/content.html> を表示します。
2. **Oracle9i JDeveloper Downloads** セクションにある、「**WebDAV Extension for Oracle9i JDeveloper**」リンクをクリックします。
3. 手順に従い、「jdev9iWebDAV.zip」をクリックします。

JDeveloper 用 WebDAV アドインをインストールするには、次の手順を行います。

1. 使用しているコンピュータで稼働中の JDeveloper があれば、すべて停止します。
2. ダウンロードした jdev9iWebDAV.zip ファイルを、一時ディレクトリに展開します。
3. JDeveloper がインストールされたディレクトリに移動します。

4. dav4j.jar、dav4j_license.htm、jdwebdav.jar、xml4j.jar の各ファイルを、
%ORACLE_HOME%\jdev\lib\ext ディレクトリ (Windows) または \$ORACLE_
HOME/jdev/lib/ext ディレクトリ (UNIX) にコピーします。

次回から JDeveloper を起動すると、WebDAV 接続を作成および使用できます。

JDeveloper の WebDAV 対応についての詳細は、JDeveloper のオンライン・ヘルプを参照してください。

3.2.2.1.2 ソース・コード・コントロールの有効化 (Windows のみ)

Oracle9i Software Configuration Manager (SCM) のリポジトリに接続するには、JDeveloper 側から SCM を使用してソース・コードをコントロールする必要があります。リポジトリは、Oracle データベース内にあらかじめ作成しておいてください。データベース内にリポジトリを作成するには、Rapid Application Development オプションをインストール、SCM に付属の Repository Administration Utility を使用します。リポジトリの作成についての詳細は、『Oracle SCM Repository Installation Guide』を参照してください。

3.2.2.1.3 フォントの問題 (UNIX の場合)

UNIX 上で JDeveloper を起動すると、次のようなエラー・メッセージが表示される場合があります。

```
Font specified in font.properties not found
[--symbol-medium-r-normal---%d-*-*p-*adobe-fontspecific]
```

これは、必要なフォントが JDK から使用できるように設定されていないことを表します。JDeveloper はデフォルトで、各 JDK に含まれるファイル font.properties の記述に従います。しかし記述どおりのフォントが使用できるようになっていないと、上記のようなエラー・メッセージが表示されます。これを解消するには、記述どおりにフォントをインストールするか、font.properties ファイルの記述を変更する必要があります。新しいフォントをインストールする手順については、各コンピュータの製造元にお問い合わせください。font.properties ファイルの修正方法については、JDK の配布元が作成しているドキュメント、または次の Web サイトにある、Sun 社の『フォントの概要』ドキュメントを参照してください。

<http://java.sun.com/j2se/1.3/ja/docs/ja/guide/intl/addingfonts.html>

3.2.2.1.4 ドキュメントのホスティング

ホストされたドキュメントを使用するように IDE オプションを設定した場合、JDeveloper は OTN-J でホストされるドキュメントを使用するよう、あらかじめ設定されます。OTN-J で設定されるドキュメントには、次の URL でアクセスします。

<http://otn.oracle.co.jp/products/jdev/help/902/ja/jdeveloper/jdeveloper.hs>

なお、ホストされたヘルプ・システムを初めて起動したとき、初期化のために数分かかる可能性があります。

上記のサイト以外にも、独自にホストを設定してドキュメントのホスティングを行うことができます。ファイアウォールで保護されている場合、ネットワークの通信速度が遅い場合、または JDeveloper ドキュメントに情報を追加する場合などに、独自のホストを設定すると便利です。JDeveloper ドキュメントの拡張については、JDeveloper に付属している『Oracle Help for Java (OHJ)』を参照してください。

JDeveloper ドキュメントをホストするには、次の手順を行います。

- `$ORACLE_HOME/jdev/doc/ohj` にある jar ファイルを圧縮解除し、Web サーバーに置きます。基本インストールを行う場合、ドキュメントを OTN からダウンロードする必要があります。jar ファイルは、それぞれ別のディレクトリに圧縮解除します。
- `jdeveloper.hs` ファイルを修正して、サーバー上に置いた個々のヘルプ・ファイルの URL を正しく指すようにします。このファイルの記述例は、`$ORACLE_HOME/jdev/doc/ohj/jdeveloper.jar` 内の `jdeveloper-hosted-example.xml` を参照してください。

ファイルの修正後、各ユーザーは、JDeveloper が新しく指定したサーバーを使用するように設定する必要があります。IDE の「設定」ダイアログ・ボックスで、「ドキュメント」ページを表示します。このページで「ホストのドキュメントを使用」ラジオ・ボタンを選択します。また、サーバー上にある `jdeveloper.hs` ファイルの URL を指定します。

3.2.2.1.5 Terminal Server/ マルチユーザー環境での JDeveloper の使用法

JDeveloper を Microsoft Terminal Server または Citrix MetaFrame 環境にインストールして、1 つの JDeveloper を多数のクライアントがアクセスできるように設定できます。すべての場合において、プロジェクトをローカルに保存できます。

マルチユーザー環境に JDeveloper をインストールおよび設定するとき、最適な性能で運用できるよう、ユーザー数やサーバーの処理能力などのリソース計画を把握しておく必要があります。

Citrix MetaFrame Server または Microsoft Terminal Server への JDeveloper のインストール

JDeveloper をインストールするには管理者権限が必要です。

- Citrix または Microsoft Server に JDeveloper をインストールするには、次の手順を行います。
 - J2EE Development インストール・タイプを選択し、JDeveloper をインストールします。
 - ユーザーのホーム・ディレクトリを表す環境変数を、次のように定義します。

マルチユーザー環境におけるユーザー・ホーム・ディレクトリの設定

(以下は Windows の場合の説明ですが、同じ考え方が UNIX の場合にも適用されます)

Terminal Server 環境で JDeveloper を稼動する前に、JDeveloper がユーザー・ホーム・ディレクトリを正しく識別できるように、ユーザーのホーム・ディレクトリを表す環境変数を定

義して、各ユーザーに対する値を設定する必要があります。環境変数の定義および設定を行わないと、すべてのユーザーに対して %ORACLE_HOME%\jdev ホーム・ディレクトリが使用されます。ただし、マルチユーザー環境でこのディレクトリを使用すると、動作が不安定になる可能性があります。

■ ユーザー・ホーム環境変数名を定義するには、次の手順を行います。

- テキスト・エディタでファイル %ORACLE_HOME%\jdev\bin\jdev.conf を開きます。ワードパッドなど、UNIX の改行文字を認識できるエディタを使用してください。
- 次のエントリを検索します。

```
SetUserHomeVariable JDEV_USER_DIR
```

これは、JDeveloper が起動時に検索する、デフォルトの環境変数名です。Terminal Server の管理者は、システムの命名規則に従ってこの変数名を変更できます。

- ファイルを保存します。ワードパッドを使用する場合、テキストのみの書式でファイルを保存してよいかどうか、警告が表示されます。この警告は無視しても構いません。

環境変数を設定するには、次の手順を行います。

注意： マルチユーザー・システムで JDeveloper を稼動する場合、すべてのユーザーが次の操作を行う必要があります。

- a. Windows の「スタート」メニューから、「コントロール・パネル」→「システム」を選択します。
- b. 「環境変数」タブを選択します。
- c. ユーザーの環境変数に JDEV_USER_DIR、または前の手順で選択した名前を追加します。
- d. この変数の値にホーム・ディレクトリ（たとえば N:\users\jdoe）を設定し、「OK」をクリックします。
- e. コマンド・シェルを開き、次のように入力して、変数の設定を確認します。

```
set
```

次のような出力が得られます。

```
JDEV_USER_DIR=N:\users\jdoe
```

- f. JDeveloper を起動します。
- g. ユーザー・ホーム・ディレクトリを作成するかどうか問われます。「はい」を選択します。

- h. 「ヘルプ」→「バージョン情報」を選択し、`ide.user.dir` にユーザー・ホーム・ディレクトリが正しく設定されているかを確認します。

JDeveloper を稼動するための Terminal Server クライアントの設定

以下の説明は、Citrix MetaFrame または Microsoft Terminal Server のクライアントをローカルに既にインストールし、システム管理者によって JDeveloper のインストールおよび設定が行われたと仮定しています。

- JDeveloper を稼動するために Terminal Server クライアントを設定するには、次の手順を行います。
 - a. Terminal Server クライアントの画面は、256 色以上に設定する必要があります。これは JDK の要件によるものです。
 - b. Terminal Server にログインします。
 - c. ユーザーのホーム・ディレクトリを表す環境変数の名前が定義済みであることを確認します。システムで使用される命名規則については、システム管理者に問い合わせてください。デフォルト値は `JDEV_USER_DIR` です。
 - d. ユーザー・ホーム・ディレクトリを表す環境変数を設定するには、次の手順を行います。
 - Windows の「スタート」メニューから、「コントロール・パネル」→「システム」を選択します。
 - 「環境変数」タブをクリックします。
 - ユーザーの環境変数にホーム・ディレクトリを設定し、「OK」をクリックします。たとえば、ユーザーのホーム・ディレクトリへのパスを含む変数として `JDEV_USER_DIR` を定義できます。
 - コマンド・シェルを開き、次のように入力して、変数の設定が正しいことを確認します。

```
set
```

次のような出力が得られます。

```
JDEV_USER_DIR=n:¥users¥jdoe
```
 - e. JDeveloper を起動します。
 - f. ユーザー・ホーム・ディレクトリを作成するかどうか問われます。「はい」を選択します。
 - g. 「ヘルプ」→「バージョン情報」を選択し、`ide.user.dir` にユーザー・ホーム・ディレクトリが正しく設定されているかを確認します。

マルチユーザー環境で JDeveloper を起動すると、次のようなエラーが発生することがあります。

```
The system DLL ole32.dll was relocated in memory.The
application will not run properly.The relocation occurred
because the DLL Dynamically Allocated Memory occupied an
address range reserved for Windows NT system DLL's. The vendor
supplying the DLL should be contacted for a new DLL.
```

この場合、`%ORACLE_HOME%\jdev\bin\jdev.conf` ファイルに次の行を追加してください。

```
AddVMOption -Xheapbase100000000
```

ワードパッドなど、UNIX の改行文字を認識できるエディタを使用してください。それでもまだエラーが発生する場合は、数を増減してみてください。ワードパッドを使用する場合、テキストのみの書式でファイルを保存してよいかどうか、警告が表示されます。この警告は無視しても構いません。

さらに、「プロジェクト」「デフォルトのプロジェクト設定」「実行」の順に選択すると表示される「Java オプション」にも、同じ値で同じオプションを設定する必要があります。

他のすべてのユーザーがこの設定を使用できるように、管理者は設定を変更した後 JDeveloper を終了し、ファイル

```
<userhome>\system\DefaultWorkspace\Project1.jpr
```

を次の場所にコピーしてください。

```
%ORACLE_HOME%\jdev\multi\system\DefaultWorkspace\Project1.jpr
```

3.2.2.1.6 JDeveloper で非埋め込みモードの OC4J を使用

J2EE Development オプションでインストールを行った場合、Oracle9i AS Containers for J2EE (OC4J) の機能をすべて利用できます。JDeveloper でアプリケーションのテストを行う場合、埋め込みモードの OC4J を利用するので、設定を変更する必要はありません。サーバーでも同じ設定を使用する場合は、JDeveloper に付属のバージョンを使用できます。

非埋め込みモードの OC4J サーバーを設定するには、次の手順を行います。

1. `$ORACLE_HOME/j2ee/home` ディレクトリのコマンド・ラインで、次のコマンドを実行します。

```
java -jar oc4j.jar -install
```

複数の jar ファイルが圧縮解除されます。ここで管理者のパスワードを入力するよう求められます。

2. 管理者のパスワードを入力し、[Enter] キーを押します。

パスワードの確認を求められます。

3. パスワードをもう一度入力して [Enter] キーを押し、パスワードを確認します。

これでインストール作業は完了です。

サーバーを起動します。

非埋め込みモードの OC4J サーバーを起動するには、次の手順を行います。

- \$ORACLE_HOME/j2ee/home ディレクトリのコマンド・ラインで、次のコマンドを実行します。

```
java -jar oc4j.jar
```

複数の jar ファイルが自動的にデプロイされ、サーバーから次の出力が得られます。

```
Oracle9iAS (9.0.2.0.0) Containers for J2EE initialized
```

OC4J サーバーのインスタンスを調整する方法については、OC4J のドキュメントを参照してください。

注意： プロジェクトをデプロイするとき、サーバーが稼動している必要があります。

含まれるサーバーを使用しても、JDeveloper を使用してプロジェクトをテストしたり実行する妨げにはなりません。

3.2.2.1.7 JDeveloper でのユーザー補助機能の使用法 (Windows のみ)

まず、[3.2.1.5 項「ユーザー補助機能 \(Windows のみ\)」](#)の手順に従って、Java Access Bridge のファイルを正しくインストールします。次に、以下の手順で、JDeveloper が Java Access Bridge とともに動作することを確認します。

1. 2 つの DLL ファイル JavaAccessBridge.dll および WindowsAccessBridge.dll が、システム・パスである Winnt¥System32 ディレクトリに追加されたことを確認します。追加されなかった場合は、<accessbridge_home>¥installer¥installerFiles からコピーします。
2. %ORACLE_HOME%¥jdev¥bin ディレクトリにあるファイル jdev.conf を修正します。AddVMOption 行が注釈になっているので、これを外して次のようにしてください。

```
#
# Prepend patches to the bootclasspath. Currently, rtpatch.jar
# contains a
# patch that fixes the javax.swing.JTree accessibility problems.
# JAWS で JDeveloper を稼動する必要がある場合には、下の行の注釈を外します。
#
AddVMOption
-Xbootclasspath/p:../..../jdk/jre/lib/patches/rtpatch.jar
```


3. また、JDeveloper を稼動するには、OJVM の代わりに Hotspot を使用する必要があります。Hotspot を使用するには、`jdev.conf` ファイルの `SetJavaVM` 行を、次のように修正します。

```
SetJavaVM hotspot
```

4. スクリーン・リーダーを起動します。
5. JDeveloper を起動します。

以上の手順は、Windows を稼動して、Windows ベースの画面読み上げ機能を使用している場合を想定しています。JDeveloper を起動して、エラーが発生した場合は、まずエラー情報が含まれるコンソール・ウィンドウが表示され、次に JDeveloper のメイン・ウィンドウが表示されます。

3.2.2.2 Oracle9i Business Intelligence (BI) Beans

本リリースではこの機能はサポートされません。

3.2.2.3 Oracle9i Reports Developer

- Oracle9iAS Portal を統合する手順については、「Oracle9iAS Reports Services レポート Web 公開ガイド」を参照してください。
- Oracle OLAP Server の多次元データを基に報告書を作成する場合、Reports Developer オンライン・ヘルプの **Express** データ・ソースの設定方法を参照してください。「Express データ・ソースの構成」という項目を検索してください。『Oracle9i Reports Developer リリース・ノート』にも、Oracle OLAP Server への接続準備に関する重要な情報が記載されています。
- Oracle9iAS Reports Services の起動および停止の手順については、「Oracle9iAS Reports Services レポート Web 公開ガイド」を参照してください。
- 電子メールの送信に使用するサーバーは、Reports Server 構成ファイル `reports_server_name.conf` で変更できます。このファイルは `%ORACLE_HOME%\reports\conf` ディレクトリ (Windows) または `$ORACLE_HOME/reports/conf` ディレクトリ (UNIX) にあります。
- Oracle9iAS に付属の Merant JDBC ドライバを使用して作成した Reports は、Oracle9iAS でデプロイする必要があります。他のアプリケーション・サーバーは使用できません。他のアプリケーション・サーバーに対する JDBC 問合せにより Reports をデプロイできるようにする場合は、Merant ドライバのライセンスを取得するか、開発およびデプロイ用に別の JDBC ドライバを使用する必要があります。

Oracle9iAS に付属の Merant JDBC ドライバを使用するには、Oracle9iDS をインストールしたときと同じ Oracle ホームに、Oracle9iAS をインストールします。このとき、インストール・オプションに `J2EE` と `Web Cache` を指定します。次に、`%ORACLE_HOME%\reports\conf\jdbcpds.conf` ファイル (Windows) または `$ORACLE_`

HOME/reports/conf/jdbcpsds.conf ファイル (UNIX) に、Merant JDBC ドライバに関する情報を追加してください。

ドライバに関する情報としては、通常、ドライバ名、接続文字列の書式、ドライバの Java クラスを指定します。

たとえば、Sybase を使用する場合、Merant ドライバに関する記述は次のようになります。

```
<driver name = "sybase-merant" subProtocol = "merant:sybase"
connectString = "jdbc:subProtocol://databaseName"
class = "com.merant.datadirect.jdbc.sybase.SybaseDriver"
></driver>
```

ここで、

name は、Reports Developer で JDBC ドライバを特定するための、一意な名前です。

subProtocol はドライバによって異なるので、それぞれのドキュメントを参照してください。たとえば、Merant ドライバを Sybase データベース用に使用する場合、subProtocol は「merant:sybase」となります。また、SQL Server データベース用の場合は、「sqlserver」となります。

connectString は、ドライバの接続文字列の書式です。

上の例では、

jdbc:subProtocol://databaseName と指定しています。

class はドライバのメイン Java クラス・ファイル名です。この値はドライバによって異なるので、それぞれのドキュメントを参照してください。たとえば、Sybase データベース用 Merant ドライバの場合は「com.merant.datadirect.jdbc.sybase.SybaseDriver」、SQL Server データベース用の場合は「com.merant.datadirect.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver」となります。

詳細は、%ORACLE_HOME%\reports\conf\jdbcpsds.conf ファイル (Windows)、または \$ORACLE_HOME/reports/conf/jdbcpsds.conf ファイル (UNIX) の説明を参照してください。また、JDBC ドライバを使用して Reports を構築する手順については、Reports Developer オンライン・ヘルプの「JDBC PDS」という節も参照してください。

- **Windows の場合のみ:** Business Intelligence オプションでインストールした場合、Reports Developer から Oracle9i Software Configuration Manager のソース・コード管理機能を使用するには、Rapid Application Development または完全オプションをインストールしてください。

3.2.2.4 Oracle9i Discoverer Administrator

- Discoverer Administrator（従来の Administration Edition リリース 4.1 に相当）の旧バージョンがインストールされている場合、Oracle9i Discoverer Administrator で管理作業を行うには、End User Layer を更新する必要があります。詳細は、『Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド』の第 24 章「Discoverer リリース 9.0.2 へのアップグレード」を参照してください。

3.2.2.5 Oracle9i Warehouse Builder

- Oracle9i Warehouse Builder（OWB）で英語以外のデータを扱うためには、該当する言語の文字を扱えるデータベースが必要です。英語以外のデータベースを作成する手順については、『Oracle9i Application Server グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。
- OWB Client の RAM 使用量は、最大 256 MB と設定されています。必要ならば次のファイルを編集して、この上限を増やしてください。

```
%ORACLE_HOME%\owb\bin\win32\owbclient.bat
```

RAM の最大使用量は「-mx」オプションで指定されているので、この値を修正します。OWB Client、および同時に動作する他のすべての処理に十分な RAM を指定してください。

- データベースに、OWB Repository、OWB Runtime Library、OWB Browser の各表を作成します。Repository Assistant、Runtime Assistant、Browser Assistant の各構成ツールについては、『Oracle9i Warehouse Builder 構成ガイド』を参照してください。
- Oracle Enterprise Manager（OEM）および Oracle Workflow（OWF）を使用したジョブのスケジューリング、依存関係の管理を行うための設定方法については、『Oracle9i Warehouse Builder 構成ガイド』を参照してください。

3.2.2.6 Oracle9i Clickstream Intelligence Builder

以下の説明は、Oracle9i Application Server リリース 2（9.0.2）の Business Intelligence および Forms オプションがインストール済みであり、したがって、clkrnt および clkana の 2 つの Clickstream スキーマが、データベースに既に存在すると仮定しています。

- click.mdl に格納されているメタデータを OWB に読み込みます。

OWB インポート・ユーティリティを使用して、クリック・プロジェクトのメタデータを既存の OWB リポジトリにインポートします。操作手順の詳細は、『Oracle9i Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Click.mdl は %ORACLE_HOME%\click\admin\repository ディレクトリにあります。ここで ORACLE_HOME は、Oracle9iDS のインストール時に作成した Oracle ホームを示します。.mdl ファイルは、OWB を利用して、Clickstream Intelligence データ・モデルを拡張するためのものです。このクリック・プロジェクト・ファイルには、Oracle9iAS Clickstream Intelligence オブジェクトがすべて、Oracle9i Warehouse Builder にあるのと同じ形で定義されています。Clickstream データ・モデルの拡張につ

いては、『Oracle9i Clickstream Intelligence Data Model Reference Guide』を参照してください。

- Clickstream Intelligence の End User Layer (EUL) メタデータを、Oracle9i Discoverer Administrator に読み込みます。

まず、Discoverer Administrator の「EUL マネージャ」ダイアログ・ボックスを開いて、空の EUL を作成します。

次に、Discoverer Administrator インポート・ウィザードを使用して、EUL に Clickstream EUL オブジェクトを読み込みます。このメタデータは、`%ORACLE_HOME%\clickstream\install\analytics\discoverer\LANGUAGE` ディレクトリの `clickstream_intelligence_eul_full.eex` ファイルにあります。ここで ORACLE_HOME は、Oracle9iDS のインストール時に作成した Oracle ホームを表します。また、LANGUAGE は、インストール時に選択した言語を表す 2 文字のコードです。clickstream_intelligence_eul_full.eex ファイルの LANGUAGE 変数は、インストール時に選択した言語と一致する必要があります。

最後に、Discoverer Administrator File Import Utility を使用して、Clickstream の EUL を Clickstream Analytics スキーマ (clkana) にインポートします。

操作手順の詳細は、『Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド』を参照してください。

clickstream_intelligence_eul_full.eex ファイルは、Oracle9iAS Discoverer を利用して、報告書作成機能を拡張するためのものです。Clickstream EUL に格納されたメタデータは、Clickstream Analytics を拡張する基盤となる、clkana データベース・スキーマを定義します。Clickstream Analytics についての詳細は、『Oracle9iAS Clickstream Intelligence User's Guide』を参照してください。

3.2.2.7 Oracle9i Forms Developer

- Forms Developer からストアド Java オブジェクトを利用するためには、必要な Java クラスおよび PL/SQL パッケージを、Oracle9i データベースにインストールする必要があります。Forms Developer の Java Object サポートをインストールするには、次の手順を行います。

- a. `%ORACLE_HOME%\dbs` ディレクトリ (Windows) または `$ORACLE_HOME/dbs` ディレクトリ (UNIX) にあるインストール・スクリプトを検索します。Java Object サポートをインストールするには、次のファイルが必要です。

`dejavins.sql`

`dejavaux.sql`

`derefls.plb`

`dereflb.plb`

`dedbjava.jar`

- b. スクリプトが格納されているディレクトリから、SQL Plus を起動します。
- c. SYSTEM としてログインし、スクリプトを実行します。

インストールが正常に完了すれば、スキーマ SYSTEM の下に ORA_DE_REFLECTION パッケージ (deref1s.plb および deref1b.plb) が見つかります。

- Oracle9i Application Server への Forms アプリケーションのデプロイについての詳細は、『Oracle9iAS Forms Services 利用ガイド』を参照してください。
- Forms アプリケーションを Forms6i から Forms9i に移行するために、開発者、システム管理者、データベース管理者が知っておくべき情報については、『Oracle9i Forms Developer and Forms Services Forms アプリケーションの Forms6i からの移行』を参照してください。
- ソース・コントロール管理やデバッガの機能を使用する場合、その設定方法については、Forms Developer オンライン・ヘルプを参照してください。
- オンライン・ヘルプを更新するには、次の OTN-J Web サイトから JAR ファイルをダウンロードしてください。

<http://otn.oracle.co.jp>

3.2.2.8 Oracle9i Software Configuration Manager (従来の Oracle Repository に相当)

- 新しいリポジトリをインストールする、または既存のリポジトリを更新または移行する手順については、『Oracle SCM Repository Installation Guide』を参照してください。既存のリポジトリを更新または移行する手順については、[付録 A 「移行に関する注意」](#) の [A.8 項 「Oracle9i Software Configuration Manager」](#) も参照してください。

3.2.2.9 Oracle9i Designer

- JInitiator をクライアント側にインストールします。これは、Oracle9i Designer で生成される Oracle Forms を動作させるために必要です。JInitiator をインストールするには、`%ORACLE_HOME%\jinit` ディレクトリにある `jinit.exe` ファイルを実行します。

Designer の使用中、生成された Oracle Forms を動作させるためには、他にも準備が必要です。詳細は『Oracle9i Designer リリース・ノート』を参照してください。
- 新しいリポジトリをインストールする、または既存のリポジトリを更新または移行する手順については、『Oracle SCM Repository Installation Guide』を参照してください。既存のリポジトリを更新または移行する手順については、[付録 A 「移行に関する注意」](#) の [A.9 項 「Oracle9i Designer」](#) も参照してください。

3.2.3 その他のドキュメント

すべてのコンポーネントにはそれぞれオンライン・ヘルプが付属し、製品とともに自動的にインストールされます。

リリース・ノートや、コンポーネントごとのインストール後の作業や設定に関するさらに詳しい情報は、リリース・ノートおよびコンポーネント別の管理または構成ガイドを参照してください。

Windows の場合、リリース・ノートや準備作業の情報にアクセスするには、「スタート」メニューから次の順に選択します。

「スタート」→「プログラム」→「Oracle9i Developer Suite - ORACLE_HOME」→「Release Notes」

「スタート」→「プログラム」→「Oracle9i Developer Suite - ORACLE_HOME」→「Documentation」→「Getting Started」

最新版のドキュメント、ホワイト・ペーパー、その他の付属資料は、次の OTN-J の Web サイトからもダウンロードできます。

<http://otn.oracle.co.jp>

アンインストールと再インストール

この章では、Oracle9i Developer Suite のアンインストールおよび再インストールの手順を、次の項目に分けて説明します。

- アンインストール
- 再インストール

4.1 アンインストール

Oracle9iDS のアンインストール手順について説明します。

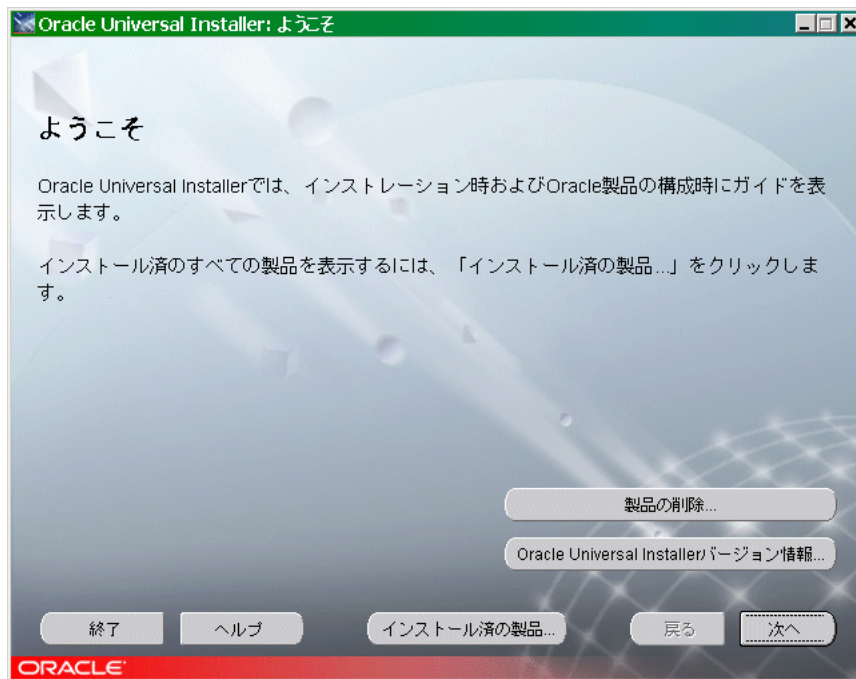
4.1.1 Oracle Universal Installer を使用したアンインストール手順

注意： アンインストール処理を開始する前に、オラクルのサービスやプロセスをすべて停止してください。

1. Oracle Universal Installer を起動します。手順についての詳細は、[2.6.2 項「Oracle Universal Installer の起動」](#)を参照してください。

Oracle Universal Installer が起動すると、「ようこそ」画面が表示されます。「製品の削除」をクリックします。

図 4-1 「ようこそ」画面

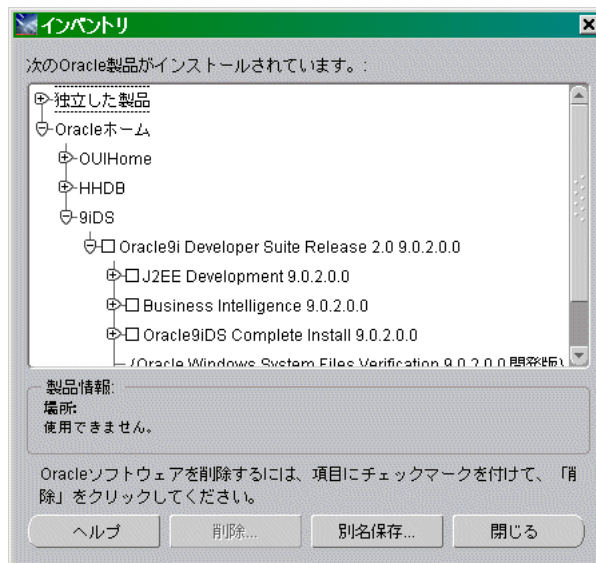


「ようこそ」画面には、アンインストール処理を行うボタンが2つあります。

- **製品の削除**：製品を個別に指定して、あるいはすべての Oracle 製品をまとめてアンインストールします。
 - **インストール済の製品**：現在インストールされている製品を表示し、製品を個別に指定して、あるいはすべての Oracle 製品をまとめてアンインストールします。
2. 「インベントリ」画面に、インストールされている製品名が表示されます。アンインストールする製品にチェックを付け、「削除」をクリックします。

注意： Oracle9iDS の各コンポーネントを、個別にアンインストールすることはできません。

図 4-2 「インベントリ」画面



「インベントリ」画面は、「ようこそ」画面で「**製品の削除**」をクリックするか、他の画面で「**インストール済の製品**」をクリックすると表示されます。

「インベントリ」画面には、すべての Oracle ホームにインストールされている Oracle 製品名がすべて表示されます。

注意： 製品名の前に「+」という記号があれば、そこにさらにコンポーネントやファイルがインストールされていることを表します。

「+」記号をクリックすると、コンポーネントやファイルの名前が展開表示されます。

ある製品をアンインストールすれば、それを構成するコンポーネントやファイルもすべてアンインストールされます。

Oracle9iDS を完全にアンインストールするには、該当する Oracle ホーム名のすぐ下にある、製品が表示された項目にチェックを入れます。

「インベントリ」画面には、次のボタンや、製品についての説明も表示されます。

- **ヘルプ：**「インベントリ」画面の機能を詳しく説明した画面を開きます。
- **削除：**チェックを付けた製品を、Oracle ホームからアンインストールします。確認画面が表示されます。
- **別名保存：**インストールされた製品名の一覧を、テキスト・ファイルに保存します。「別名保存」をクリックすると、ファイル保存ダイアログ・ボックスが表示されます。ファイル名を指定すると、画面に表示されている製品名の一覧が、テキスト・ファイルとして保存されます。
- **閉じる：**「インベントリ」画面を閉じます。
- **場所：**選択された製品やコンポーネントの場所を、絶対パスで表示します。

3. 「確認」画面でアンインストールする製品名が正しく表示されていることを確認し、「はい」をクリックします。

図 4-3 「確認」画面



「確認」画面は、「インベントリ」画面で「**削除**」をクリックすると表示されます。

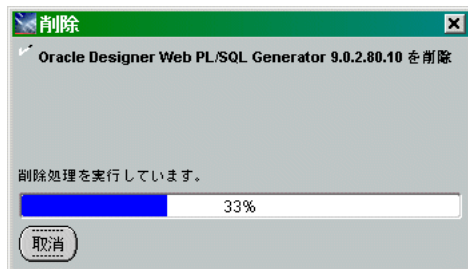
「確認」画面には、アンインストールの対象として選択した製品名が表示されます。必要に応じてスクロールし、製品名を確認してください。

「確認」画面には次のボタンがあります。

- **ヘルプ**: 「確認」画面の機能を詳しく説明した画面を開きます。
- **はい**: 選択した製品のアンインストールを開始します。
- **いいえ**: 「インベントリ」画面に戻ります。選択した製品は Oracle ホームから削除されません。

4. アンインストール処理の進行状況を監視します。

図 4-4 「削除」 プロGRESS・バー画面



「削除」プロGRESS・バー画面は、「確認」画面で「はい」をクリックすると表示されます。アンインストールする製品がインストーラによってすべて検出され、Oracle ホームから削除されます。

「削除」プロGRESS・バー画面には次のボタンがあります。

- **取消** : アンインストールを中断します。アンインストール処理の中断を確認するダイアログ・ボックスが表示されます。「はい」をクリックしてアンインストールを中断するか、「いいえ」をクリックしてアンインストールを続行します。
5. アンインストールが完了すると、再び「インベントリ」画面が表示されます。「閉じる」をクリックして、アンインストール処理を終了します。

これで Oracle9iDS がアンインストールされました。

4.2 再インストール

Oracle9iDS がすでにインストールされている場合、同じバージョンを再度インストールすることはできません。

同じバージョンを再インストールするには、既存の Oracle9iDS をアンインストールしてから、再インストールしてください。

関連項目： [4.1 項「アンインストール」](#)

移行に関する注意

この付録では、Oracle9i Developer Suite の旧バージョンからの移行またはアップグレードについての基本的な情報を説明します。説明する項目は以下のとおりです。

[Oracle9i Developer Suite](#)

[Oracle9i JDeveloper](#)

[Oracle9i Reports Developer](#)

[Oracle9i Discoverer Administrator](#)

[Oracle9i Warehouse Builder](#)

[Oracle9i Clickstream Intelligence Builder](#)

[Oracle9i Forms Developer](#)

[Oracle9i Software Configuration Manager](#)

[Oracle9i Designer](#)

[その他のドキュメント](#)

A.1 Oracle9i Developer Suite

Oracle9i Developer Suite リリース 2 (9.0.2) の旧バージョンは、Oracle Internet Developer Suite リリース 1 です。Oracle9i Developer Suite のコンポーネントは、表 A-1 に示すように、すべて新しいバージョンに変わりました。

表 A-1 Oracle9i Developer Suite で更新されたコンポーネント

コンポーネント	リリース 1	リリース 2 バージョン
Oracle9i JDeveloper (Oracle9i Business Intelligence Beans と、UIX および Bali のサブコンポーネントを含む)	3.2.3	9.0.2.x
Oracle9i Reports Developer	6i	9.0.2.x
Oracle9i Discoverer Administrator (従来の Discoverer Administration Edition に相当。Oracle9i Discoverer Desktop を含む)	4.1.x	9.0.2.x
Oracle9i Warehouse Builder	-	9.0.2.x
Oracle9i Clickstream Intelligence Builder	-	9.0.2.x
Oracle9i Forms Developer	6i	9.0.2.x
Oracle9i Software Configuration Manager (従来の Oracle Repository に相当)	6i	9.0.2.x
Oracle9i Designer	6i	9.0.2.x

同一コンピュータ上で Oracle Internet Developer Suite リリース 1 から Oracle9i Developer Suite リリース 2 (9.0.2) に移行するには、Oracle9i Developer Suite リリース 2 (9.0.2) を新しい Oracle ホームにインストールする必要があります。旧バージョンがインストールされている Oracle ホームに Oracle9i Developer Suite リリース 2 (9.0.2) をインストールする手順については、2.4 項「他の製品との共存」を参照してください。

Oracle9i Developer Suite リリース 2 (9.0.2) をインストールした後、インストール後に必要な作業を完了すると、次の説明に従って各コンポーネントを移行します。

A.2 Oracle9i JDeveloper

オンライン・ヘルプの『Oracle9i JDeveloper へようこそ』に含まれる「Oracle9i JDeveloper へのプロジェクトの移行方法」を参照してください。

A.3 Oracle9i Reports Developer

- 6i Reports のサーバー用 persistent ファイルや構成ファイルを再使用する場合は、次のファイルをコピーします。

Windows の場合：

- %6i_ORACLE_HOME%\reports60\server\<report_server_name>.ora
を次の場所にコピーしてください。
%ORACLE_HOME%\reports\conf\<report_server_name>.ora にコピーします。
- %6i_ORACLE_HOME%\reports60\server\<report_server_name>.dat
を次の場所にコピーしてください。
%ORACLE_HOME%\reports\server\<report_server_name>.dat にコピーします。

UNIX の場合：

- \$6i_ORACLE_HOME/reports60/server/<report_server_name>.ora
を次の場所にコピーしてください。
\$ORACLE_HOME/reports/conf/<report_server_name>.ora にコピーします。
- \$6i_ORACLE_HOME/reports60/server/<report_server_name>.dat
を次の場所にコピーしてください。
\$ORACLE_HOME/reports/server/<report_server_name>.dat にコピーします。
- 旧バージョンの Oracle Reports から .rdf ファイルを開き、PL/SQL を再コンパイルする必要があります。
- Oracle9iAS リリース 1.0.x で Oracle Discoverer をインストールした場合、Visibroker 3.4 もインストールされています。新しい Oracle9iAS Reports Services を使用するには Visibroker 4.5 が必要ですが、Visibroker 3.4 と同時に実行できません。Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) の Oracle9iAS Reports Services を、旧バージョンの Oracle Discoverer と同じコンピュータにインストールする場合は、事前に Visibroker 3.4 を停止する必要があります。また、インストール後、旧バージョンの Oracle Discoverer を実行する必要がある場合は、Visibroker 4.5 を停止してから Visibroker 3.4 を起動してください。なお、再び Visibroker 4.5 を起動するまでは、Oracle9iAS Reports Services リリース 9.0.2 コンポーネントは使用できません。

A.4 Oracle9i Discoverer Administrator

Oracle9i Discoverer Administrator は、従来の Oracle Discoverer Administration Edition に相当します。

これまで Discoverer Administration Edition リリース 4.1 を利用していた場合、今後の管理作業を Oracle9i Discoverer Administrator で行うには、リリース 4.1 の End User Layer (EUL) を、Oracle9iDS のバージョンにアップグレードする必要があります。

アップグレードするには、Discoverer の現行バージョンから EUL 表をコピーし、Oracle9i の EUL 表として作成し直します。従来の環境を壊すことなく処理が進むので、アップグレード中でも Discoverer リリース 4.1 による管理作業は継続できます。

EUL のアップグレード手順については、『Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド』の第 24 章「Discoverer リリース 9.0.2 へのアップグレード」を参照してください。

A.5 Oracle9i Warehouse Builder

Oracle9i Warehouse Builder は、Oracle9i Developer Suite で新しく追加されたコンポーネントです。移行の必要はありません。

A.6 Oracle9i Clickstream Intelligence Builder

Clickstream Intelligence Builder は、Oracle9i Developer Suite で新しく追加されたコンポーネントです。移行の必要はありません。

A.7 Oracle9i Forms Developer

『Oracle9i Forms Developer and Forms Services: Forms アプリケーションの Forms6i からの移行 リリース 9.0.2』を参照してください。

A.8 Oracle9i Software Configuration Manager

Oracle9i Software Configuration Manager は、従来の Oracle Repository に相当します。

- リリース 6i より前のリポジトリから移行するには、次の手順を行います。
 1. Rapid Application Development または完全オプションを指定して、Oracle9iDS をインストールします。
 2. 新しいリポジトリをインストールします。手順については、Oracle9i Developer Suite の製品 CD に収録されている『Oracle SCM Repository Installation Guide』を参照してください。
 3. バージョン 6i より前の、既存のリポジトリの内容を、新しいリポジトリに移行します。手順については、Oracle9i Developer Suite の製品 CD に収録されている『Oracle SCM Repository Installation Guide』を参照してください。
- リリース 6i のリポジトリからアップグレードするには、次の手順を行います。
 - Oracle9i Developer Suite の製品 CD に収録されている『Oracle SCM Repository Installation Guide』の手順に従い、リリース 6i のリポジトリをアップグレードします。

A.9 Oracle9i Designer

- リリース 6i より前のリポジトリから移行するには、次の手順を行います。
 1. Rapid Application Development または完全オプションを指定して、Oracle9iDS をインストールします。
 2. 新しいリポジトリをインストールします。手順については、Oracle9i Developer Suite の製品 CD に収録されている『Oracle SCM Repository Installation Guide』を参照してください。
 3. バージョン 6i より前の、既存のリポジトリの内容を、新しいリポジトリに移行します。手順については、Oracle9i Developer Suite の製品 CD に収録されている『Oracle SCM Repository Installation Guide』を参照してください。
- リリース 6i のリポジトリからアップグレードするには、次の手順を行います。
 - Oracle9i Developer Suite の製品 CD に収録されている『Oracle SCM Repository Installation Guide』の手順に従い、リリース 6i のリポジトリをアップグレードします。

A.10 その他のドキュメント

すべてのコンポーネントにはそれぞれオンライン・ヘルプが付属し、製品とともに自動的にインストールされます。一部のコンポーネントについては、「Oracle9i Developer Suite のドキュメント CD」にも追加のオンライン・ドキュメントが収録されています。

最新版のドキュメント、ホワイト・ペーパー、その他の付属資料は、次の OTN-J (Oracle Technology Network Japan) からダウンロードできます。

<http://otn.oracle.co.jp>

コンポーネント

Oracle9i Developer Suite には、最新の Oracle アプリケーション開発およびビジネス・インテリジェンス・ツールが 1 つに統合されています。Java や XML などインターネット標準技術に基づく製品群により、Oracle9i Application Server や Oracle9i Database を活用したアプリケーションを効率的に構築する、理想的な環境を実現できます。

この付録では、Oracle9i Developer Suite に付属する開発ツールについて説明します。説明する項目は次のとおりです。

[Oracle9i JDeveloper](#)

[Oracle9i Reports Developer](#)

[Oracle9i Discoverer Administrator](#)

[Oracle9i Warehouse Builder](#)

[Oracle9i Clickstream Intelligence Builder](#)

[Oracle9i Forms Developer](#)

[Oracle9i Software Configuration Manager](#)

[Oracle9i Designer](#)

[その他のドキュメント](#)

B.1 Oracle9i JDeveloper

Oracle9i JDeveloperは、J2EEおよびXMLの開発環境で、E-BusinessアプリケーションやWebサービスを開発、デバッグ、デプロイするために必要な、様々な支援機能が組み込まれています。開発効率を向上するため、業界最速のJavaデバッガや革新的なプロファイラ、そしてコード性能を分析改善するCodeCoachをはじめとする、開発の各工程にわたるツールが統合されています。さらに、アプレット、JavaBeans、JavaServer Pages、サーブレット、Enterprise JavaBeansなどの標準J2EEコンポーネントを容易に開発し、高品質を確保できるよう、ウィザード、エディタ、ビジュアル設計ツール、デプロイ・ツールも組み込まれています。

拡張性や処理性能に優れた J2EE アプリケーションを容易に開発できるよう、JDeveloperには Business Components for Java (BC4J) という、柔軟で拡張可能な J2EE フレームワークが付属しています。BC4Jは、SunのJ2EEデザイン・パターンを実装するためのオブジェクト・リレーショナル・マッピング・ツールで、品質の高いJ2EEアプリケーションを短期間で開発することができます。

B.1.1 対応するデプロイ環境

JDeveloperを使用して、様々な環境においてアプリケーションをデプロイできます。JDeveloperはSun JDK 1.3.1に基き、開発したアプリケーションやコンポーネントは、同じJDKのバージョンが稼動するJ2EE認定プラットフォーム上でデプロイできます。

JDeveloper、およびJDeveloperで開発したクライアントは様々な環境で動作しますが、このバージョンのJDeveloperは特に次の環境において認証されています。

- ブラウザ
 - Netscape Navigator 4.72 以降
 - Microsoft Internet Explorer 5.5 および 6.0
 - Java WebStart
- アプリケーション・サーバー
 - Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2)
 - Oracle9iAS Containers for J2EE 9.0.2
- クライアント側のランタイム・プラットフォーム (JDeveloperで開発され、適切なアプリケーション / データベース・サーバーにデプロイされた、アプリケーションやWebStart、JSPを利用する側のプラットフォーム)
 - Windows NT 4.0 (サービス・パック 5 以降)
 - Linux (デスクトップ環境として KDE2 または GNOME を使用)
 - HP-UX (デスクトップ環境として CDE または VUE を使用)

- JDBC
 - Oracle Thin JDBC
 - Oracle JDBC-OCI8
 - Sun JDBC-ODBC Bridge
- データベース（接続して開発できるデータ・ソース）
 - Oracle9i RDBMS R9.0.1
 - Oracle8i RDBMS R8.1.7

Netscape Navigator や Microsoft Internet Explorer に組み込まれている Java VM は、JDeveloper で使用される Java VM 1.3.1 より古いバージョンです。したがって、別に Java VM プラグインをインストールする必要がある場合もあります。Java VM プラグインは次の Web サイトからダウンロードできます。

http://java.sun.com/products/plugin/index_ja.html

B.1.2 オラクルの Web サイト

オラクル社では、様々な資料やソフトウェアを、Web を介して配布しています。代表的な Web サイトを紹介します。

- オラクル社（米国）のサイト
<http://www.oracle.com/>
- オラクル社（日本）のサイト
<http://www.oracle.co.jp/>
- Oracle9i JDeveloper
<http://www.oracle.co.jp/jdev/>
- Oracle Technology Network（米国）
<http://otn.oracle.com/>
- Oracle Technology Network Japan（日本）
<http://otn.oracle.co.jp/>
- JDeveloper on OTN
<http://otn.oracle.co.jp/products/jdev/>
- JDeveloper OTN の会議室
<http://otn.oracle.co.jp/forum/index.html>

B.1.3 Oracle9i Business Intelligence Beans

本リリースでは、この機能はサポートされません。

B.1.4 UIX

JDeveloper には UIX 技術のコンポーネントが統合されているため、サーブレットや JSP を使用する、HTML ベースのクライアントを短期間で構築できます。UIX は Java をベースとした用途の広い機能のセットで、Web アプリケーションのプレゼンテーション層全体を、柔軟に構築するためのフレームワークを構成します。UIX 技術は、ページ単位で画面を遷移する形態のアプリケーション開発用に設計されており、Oracle Browser Look and Feel の実装に活用できます。UIX 技術はすべて Java コードで実装され、oracle.cabo パッケージおよびそのサブパッケージとしてまとまっています。

B.1.5 Bali

JDeveloper には Bali 技術コンポーネントが統合されており、Java アプレットや Java アプリケーションなど、Java をベースとした従来型のクライアントを短期間で構築するために利用できます。Bali は、Java ベースのクライアント・アプリケーションのプレゼンテーション層を柔軟に構築するためのフレームワークを構成します。Bali 技術は JFC (Java Foundation Classes) のフレームワーク上に構築され、Oracle Look and Feel の実装に活用できます。Java ベースの製品に統合するコンポーネントとして、Oracle Help for Java も提供されます。Bali 技術はすべて Java で実装され、oracle.bali パッケージおよびそのサブパッケージとしてまとまっています。

B.2 Oracle9i Reports Developer

Oracle9i Reports Developer は、動的データをもとに高品質なレポートを作成し、Web 上に表示したり、紙に印刷したりするためのツールです。Reports Developer を使用して作成されたレポートは、Oracle9iAS とともにシームレスにデプロイできます。Reports Developer を使用すると、必要なデータにアクセスし、任意の形式でレポートを作成してどこにでも配布できるので、情報の公開が容易になります。たとえば、SQL データベース、OLAP データベース、XML で記述されたデータ、JDBC に対応したデータ・ソースなどからデータを公開できます。

Oracle9iAS を使用して、HTML、PDF、区切り文字付きテキスト、RTF、PostScript、PCL、XML など、様々な形式の報告書を作成できます。さらに、独自のデータドリブン Java コンポーネントや、Oracle9i Reports 用のカスタム JSP タグを、ウィザード・インタフェースを使用して HDML 文書に埋め込むことによって、HTML Reports ページの機能を拡張できます。報告書作成の作業の大部分は、ウィザードによって行われます。また、報告書のテンプレートやデータのプレビュー機能を使用して、報告書の構成を簡単にカスタマイズできます。

B.3 Oracle9i Discoverer Administrator

Oracle9i Discoverer Administrator（従来の Oracle Discoverer Administration Edition に相当）は、業務ユーザー向けにデータのビューを設計および表示するためのツールです。業務担当者は、データ・ウェアハウス、データ・マート、クリックストリーム・データ、およびオンライン・トランザクション処理システムから、Discoverer Plus（Oracle9iAS に付属）を使用してデータにアクセスできます。Discoverer Administrator には、Oracle9i Discoverer Desktop も含まれています。Discoverer Plus、Discoverer Desktop、および Discoverer Viewer の対応に必要なのは、Discoverer Administrator ツールのみです。

B.4 Oracle9i Warehouse Builder

Oracle9i Warehouse Builder（OWB）を使用することで、企業データ・ウェアハウス、データ・マート、および E-Business インテリジェンス・アプリケーションを設計およびデプロイできます。Oracle の Common Warehouse Model と組み合わせて使用すると、多様なデータ・ソースを統合するための、拡張性に富んだフレームワークが提供されます。データ・ソースとしては、フラット・ファイル、オンライン分析処理データベース、E-Business システムなどを利用できます。視覚的にわかりやすいマッピングおよび変換ツールを提供することによって、複雑な作業をすることなくデータ・ウェアハウスの設計や開発を短期間で行えるようになります。

B.5 Oracle9i Clickstream Intelligence Builder

Oracle9i Clickstream Intelligence Builder を使用して、Oracle9i Warehouse Builder（OWB）および Oracle9i Discoverer End User Layer（EUL）のメタデータ・ファイルをインストールすることにより、Oracle9iAS Clickstream Intelligence の Web ログ分析機能を拡張できます。OWB および Discoverer の管理者権限を持っている開発者は、この製品を使用して、既存のメタデータ・ファイルの修正や、メタデータ・ファイルの新規作成を行うことができます。修正したメタデータ・ファイルまたは新規のメタデータ・ファイルを使用して、Oracle9iAS Clickstream Intelligence のウェアハウス・ディメンションや、Oracle9iAS Clickstream Intelligence EUL のワークシートを作成できます。

B.6 Oracle9i Forms Developer

Oracle9i Forms Developer は、短期間でアプリケーションを開発するためのツールです。様々な Java インタフェースを備え、データベースを活用した企業クラスのインターネット・アプリケーションを、高い生産性で構築できる環境を提供します。構築ソフトウェア、リエントラント・ウィザード、プロパティ・パレットを統合し、高機能で多言語に対応した対話フォームやビジネス論理を、最小限のコードで開発できます。Forms Developer を使用して開発したアプリケーションは、Oracle9iAS に含まれる Forms Servlet や Forms Listener Servlet を使用することにより、直ちにインターネットにデプロイできます。

B.7 Oracle9i Software Configuration Manager

従来の Oracle Repository に相当する Oracle9i Software Configuration Manager (SCM) は、拡張性に富んだソフトウェア構成管理システムです。多数の開発者によって分担して行われる開発プロジェクトに、規模や複雑さにかかわらず適用できます。リポジトリ・ベースのアーキテクチャにより、開発の各工程におけるデータを、構造化されているか否かにかかわらず管理できます。SCM には、バージョン制御やバージョン履歴、コンポーネント・ベースのアプリケーション用構成管理、依存関係の管理などの機能が統合されています。

B.8 Oracle9i Designer

Oracle9i Designer を使用すると、データベース、および Java の可搬性や HTML のユーザー・インタフェースを生かしたアプリケーションを視覚的にモデル化して自動生成できます。業務内容ごとに N-Tier インターネット・アプリケーションを短期間で、正確かつ効果的にモデル化、設計、開発するためのウィザード・ベースのツールが統合されています。従来のアプリケーション用に蓄積された設計データを取り込む機能が特色の 1 つで、これまでに費やしてきた作業が無駄になりません。

B.9 その他のドキュメント

すべてのコンポーネントに対してオンライン・ヘルプ・システムが自動的にインストールされます。一部のコンポーネントについては、Oracle9i Developer Suite のドキュメント CD にも追加のオンライン・ドキュメントが収録されています。

索引

A

Access Bridge
 JDeveloper 用の設定, 3-26
 インストール, 2-11, 3-19

B

Bali, B-4

C

CLASSPATH, 2-10
CPU の要件, 2-2

D

Discoverer ファイル・インポート・ユーティリティ,
 3-30
DISPLAY, 2-13

E

End User Layer のアップグレード, A-4
EUL のアップグレード, A-4

H

HP HP-UX オペレーティング・システム
 要件, 2-7
HP JDK の場所, 2-15
HTTP リスナー, 3-18

J

Java Access Bridge
 JDeveloper 用の設定, 3-26
 インストール, 2-11, 3-19
Java Object サポート, 3-30
JDBC OCI ドライバ, 3-27
JDK, 2-11, 2-15, 3-19
JMS, 3-18
JRE, 2-11, 3-19

L

LANG, 2-11
LD_LIBRARY_PATH, 2-10
Linux オペレーティング・システム
 要件, 2-8

M

Merant JDBC ドライバ, 3-27
Microsoft Windows オペレーティング・システム
 インストールされる Oracle9iDS コンポーネント,
 2-4
 要件, 2-5

N

Net Configuration Assistant, 3-14
NLS_LANG, 3-17

O

OC4J for Forms Developer
 インスタンスの起動と停止, 3-18

- ポート番号, 3-18
- OC4J for JDeveloper
 - 非埋め込みモード, 3-25
 - ポート番号, 3-18
- OC4J for Reports Developer
 - インスタンスの起動と停止, 3-18
 - ポート番号, 3-18
- OC4J リスナー, 3-9
- Oracle Enterprise Manager, 2-3, 3-29
- Oracle Express Server, 3-27
- Oracle Net Configuration Assistant, 3-14
- Oracle Universal Installer, 2-18
 - 起動手順 (UNIX), 2-21
 - 起動手順 (Windows), 2-19
- Oracle Workflow, 2-3, 3-29
- ORACLE_HOME
 - 共存, 2-8
 - 設定, 2-12
 - 設定解除, 2-12
- Oracle9i BI Beans
 - インストール完了後の作業, 3-27
 - インストールの準備, 2-15
 - 説明, B-4
- Oracle9i Clickstream Intelligence Builder
 - インストール完了後の作業, 3-29
 - インストールの準備, 2-16
 - 説明, B-5
- Oracle9i Designer
 - インストール完了後の作業, 3-31
 - インストールの準備, 2-17
 - 説明, B-6
- Oracle9i Discoverer Administrator
 - インストール完了後の作業, 3-29
 - 説明, B-5
- Oracle9i Forms Developer
 - インストール完了後の作業, 3-30
 - 説明, B-5
- Oracle9i JDeveloper
 - インストール完了後の作業, 3-20
 - 説明, B-2
 - ドキュメントのホスティング, 3-22
 - 非埋め込みモードの OC4J, 3-25
 - マルチユーザー環境, 3-22
- Oracle9i Reports Developer
 - インストール完了後の作業, 3-27
 - 説明, B-4
- Oracle9i SCM

- インストール完了後の作業, 3-31
- インストールの準備, 2-16
- 説明, B-6
- Oracle9i Warehouse Builder
 - インストール完了後の作業, 3-29
 - インストールの準備, 2-15
 - 説明, B-5
- Oracle9iAS Containers for J2EE, 3-9
- Oracle9iAS Forms Services, 3-9
- Oracle9iAS Portal の統合, 3-27
- Oracle9iAS Reports Services, 3-9
 - 起動と停止, 3-27
- Oracle9iDS コンポーネント, B-1
- Oracle アカウントの属性, 2-15
- oraInventory ディレクトリ, 2-18
- OWB Portal Assistant, 3-29
- OWB Repository Assistant, 3-29
- OWB Runtime Assistant, 3-29
- OWB インポート・ユーティリティ, 3-29

P

- PATH, 2-10
- 「Provide Outgoing Mail Server Information」画面, 3-11

R

- Reports Server 構成ファイル, 3-27
- Repository Administration Utility, 3-21
- RMI, 3-18
- root.sh
 - 実行, 3-15

S

- SHLIB_PATH, 2-10
- Solaris オペレーティング・システム
 - インストールされる Oracle9iDS コンポーネント, 2-4
 - 要件, 2-5
- sqlnet.ora, 3-17
- startinst.bat, 3-18
- startinst.sh, 3-18
- stopinst.bat, 3-18
- stopinst.sh, 3-18
- Sun Solaris オペレーティング・システムの要件, 2-5

T

Terminal Server クライアント
 JDeveloper 用の設定, 3-24
TMP, 2-2
 設定, 2-13
TNS_ADMIN, 2-14
tnsnames.ora, 3-17

U

UNIX, B-4
「UNIX Group Name」画面, 3-5
UNIX アカウント
 作成, 2-14
UNIX グループ名
 作成, 2-14
UNIX コンピュータ
 フォントの問題, 3-21

W

WebDAV
 インストール, 3-20
 ダウンロード, 3-20
Windows オペレーティング・システム
 インストールされる Oracle9iDS コンポーネント,
 2-4
 要件, 2-5
Windows システム・ファイルのインストール, 2-20

あ

アップグレード
 6i リポジトリ, A-5
 End User Layer, A-4
 Warehouse Builder メタデータ, A-4
アンインストール, 4-2

い

移行
 Oracle9i Designer, A-5
 Oracle9i Discoverer Administrator, A-4
 Oracle9i Forms Developer, A-4
 Oracle9i JDeveloper, A-2
 Oracle9i Reports Developer, A-3

 Oracle9i SCM, A-5
 Oracle9i Warehouse Builder, A-4
インストール
 Windows システム・ファイル, 2-20
 製品、概要, 1-2
 製品、操作手順, 3-2
 手順全般, 1-3
 必要な情報, 2-17
インストール・オプション, 3-9
 UNIX のコンポーネント, 1-3
 Windows のコンポーネント, 1-3
「インストール」画面, 3-13
インストール完了後の作業, 3-17
 Oracle9i BI Beans, 3-27
 Oracle9i Clickstream Intelligence Builder, 3-29
 Oracle9i Designer, 3-31
 Oracle9i Discoverer Administrator, 3-29
 Oracle9i Forms Developer, 3-30
 Oracle9i JDeveloper, 3-20
 Oracle9i Reports Developer, 3-27
 Oracle9i SCM, 3-31
 Oracle9i Warehouse Builder, 3-29
インストールされている製品名の一覧, 4-3
「インストール・タイプ」画面, 3-8
「インストールの終了」画面, 3-16
インストールの準備, 2-10
 Oracle9i BI Beans, 2-15
 Oracle9i Clickstream Intelligence Builder, 2-16
 Oracle9i Designer, 2-17
 Oracle9i JDeveloper, 2-15
 Oracle9i SCM, 2-16
 Oracle9i Warehouse Builder, 2-15
「インベントリ」画面, 4-3
インベントリ・ディレクトリ, 2-18
「インベントリの場所」画面, 3-4

え

エラー、Windows システム・ファイル, 2-19

お

オペレーティング・システム
 インストールされる Oracle9iDS コンポーネント,
 2-4
 ソフトウェア要件, 2-5

か

「確認」画面, 4-5
環境変数
 設定, 2-12

け

「言語の選択」画面, 3-10

こ

構成ツール
 Oracle Net Configuration Assistant, 3-14
 Warehouse Builder, 3-29
「構成ツール」画面, 3-14

さ

再インストール, 4-6
「削除」プロGRESS・バー画面, 4-6
「サマリー」画面, 3-12

し

システム・ファイル・エラー (Windows), 2-19
ジョブ・スケジュール, 3-29

す

ストアド java オブジェクト, 3-30
スワップ領域, 2-2

そ

ソース・コード管理, 3-21, 3-28
ソフトウェア要件, 2-5

と

ドキュメント
 製品のヘルプ, 3-32

は

ハードウェア要件
 CPU, 2-2

TMP またはスワップ領域, 2-2
ディスク領域, 2-2
ページファイル・サイズの合計, 2-2
メモリー, 2-3

ひ

必要なディスク領域, 2-2

ふ

「ファイルの場所」画面, 3-6
文書
 リソース, ix

へ

ページファイル・サイズの合計, 2-2

ほ

ポート番号, 3-18

め

メモリー要件, 2-3

ゆ

ユーザー補助機能, 2-11, 3-19

よ

要件
 オペレーティング・システムのソフトウェア, 2-5
 ハードウェア, 2-2
「ようこそ」画面, 3-2

ら

ランタイム・サービス, 3-9

り

リスナー, 3-9
リポジトリ, 3-31

ろ

ロケール

設定, 2-10

